

334.6

M284r



0025209000

3

0025209-000

334.6-M284r

蘭領ニューギニア買収案

松江春次・著

松江春次

1934

ADE

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。

蘭領ニエーギニア買収案

秘

334.6
M284r

Handwritten notes in Chinese characters, including the characters '天' (Heaven) and '地' (Earth), and the date '1934年' (1934).

Small handwritten mark or characters near the center fold.

秘

謹呈

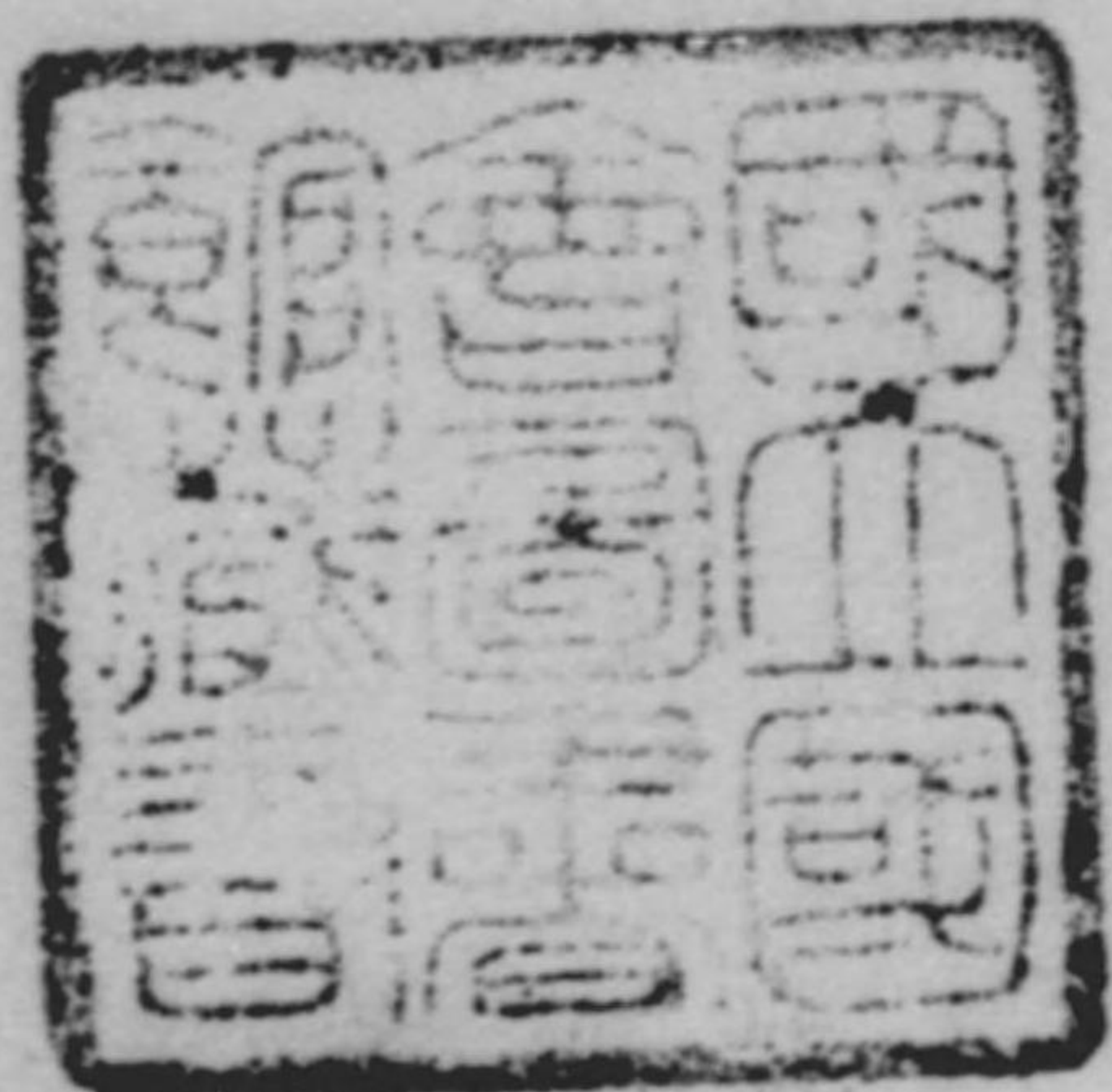
本書は小生の拾數年に亘る南洋開拓の體驗より得たる我國の人口問題解決私案に有之候間何卒御一讀を仰ぎ御指導賜り度候尚ほ本書は國際關係上誤解を招く惧も有之哉に被存候に付適當の時期迄は何卒御内密に御願申上度他には御見せなき様願上候

松江春次

蘭領ニユーギニア買収案

南洋興發株式會社
社長

松江春次述



334.6
M284r

31592



南方ノ生命線ヲ確保シ國內ニ鬱積セ
ル難問題ヲ解決スル途ハ蘭領ニユ
ギニアノ買収ニアリ

松 江 春 次

來ルベキ南洋問題ノ要點

一、蘭領東印度ノ經濟的崩壞ハ最早絕對必至ナルコト

蘭領東印度ハ既ニ經濟的ニ破産セルモノニシテ、之ガ
國內擾亂トナリ和蘭ノ統治ニ根本的罅裂ヲ來スハ最早
必至ノ事實ニシテ、爆發ノ引火點ハ左ノ何レカナリト
考ヘラル

(一) 爪哇糖業ヲ初メ蘭領印度産業ノ全面的没落ニ依リ
銀行投資ノ大部分ハ死滅ニ歸シタルヲ以テ、銀行

破綻ヲ暴露スル時ハ全ク收拾ノ途ナキニ至ルコト
(二) 蘭領印度ノ商權ヲ掌握シ政府ノ代辯タル和蘭ノ有力商社ガ何レモ致命的ノ打撃ヲ受ケ資本ノ大部分ヲ失ヒタルヲ以テ、之ガ救濟ノ途ノ立タザル時ハ在留蘭人及ビ華僑ノ殆ンド全部ハ倒産トナリ之亦收拾出來ザルコト

(三) 連年ニ互ル東印度ノ巨大ナル赤字財政ヲ常態ニ復スルコトハ全ク絶望トナリ、人口八百萬ノ微力ナル和蘭本國ガ人口六千萬面積本國ニ六十倍スル東印度ニ對シ支配權ヲ維持スルコトハ不可能ニナリタルコト

(四) 蘭領印度六千萬ノ土民ハ窮乏ノ極ニ在ルヲ以テ暴動ノ危険ハ何時爆發スルヤ測リ得ザルコト

(五) 蘭領印度ニ於ケル蘭人ハ其數二十萬ニシテ其ノ内蘭人ト數代ノ土民結婚ニ依リ全ク土民トナレル歐印人ハ十萬ヲ超エ蘭人ノ籍ヲ與ヘラル、モ社會的上位ニ立チ能ハザル結果非常ナル不平ヲ抱キ進ンデ國民運動ノ中心トナリ根強キ運動ヲ行ヒツ、アルヲ以テ思想的ニモ和蘭ノ東印度統治ハ非常ナル動搖狀態ニ在ルコト

二、今日ヨリ對策ヲ講ゼザレハ東印度ハ完全ニ英國ノ手中ニ歸シ日本ノ將來ノ發展ハ最早望マレザルモノトナルコト
最近ノ最モ顯著ナル事實ハ蘭領印度財政ノ窮迫ヲ契機トスル蘭英兩國ノ接近ニシテ、既ニ東印度ノ防備問題ヲ中心トシテ蘭英密約說ノ喧傳セララル、アリ、和蘭ノ東印度統治ガ一舉ニ崩壞シテ未曾有ノ混亂ニ陥ル場合

ニ於テ、英國ハ直チニ投下資本ノ擁護ヲ名トシテ東印度ニ乗り出スカ、或ハ和蘭ガ英國ニ救援ヲ求ムルカ何レニシテモ東印度ハ完全ニ英國ノ掌中ニ歸スルニ至ルベシ。之ハ實ニ我國ノ死命ヲ制スル重大問題ニシテ、我國民ハ北方ノ寒冷大陸又ハ遠隔ナルブラジルノミチ以テシテハ遺憾ナガラ充分ニ人口問題ヲ解決シ得ルモノニアラズ、將來ノ我國ハ人口問題ノ解決並ニ資源問題ノ解決ニ於テ絶對ニ大南洋ヲ必要トスルモノナル處之ガ英國ノ手中ニ歸サバ、日本民族ハ全然伸ビ得ルノ地ヲ失フコト、ナリ國力ノ發展ハ望ミ得ザルノミナラズ、之ニ依ツテ印度ヨリ南洋濠洲ニ互リ英國ノ一大勢力圏ヲ確立セシメナバ、東洋ニ於ケル日本ノ盟主タル地位ハ危殆ニ瀕スルノ外ナカルベシ、眞ニ重大ナル考

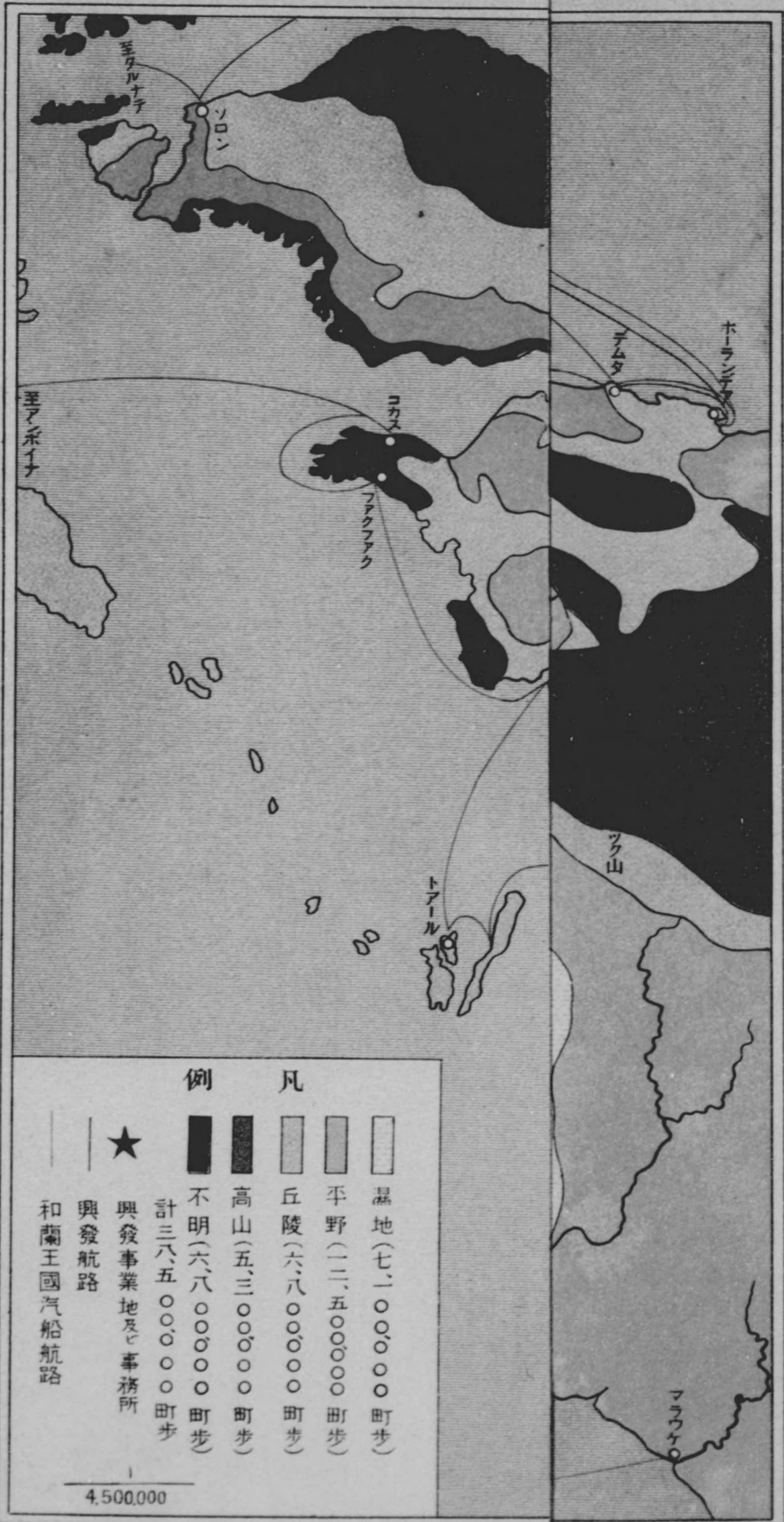
慮ヲ要スル處ナリ

三、大南洋ヲ確保シ日本民族永遠ノ發展ノ基礎ヲ築キ曠古ノ大業ヲ成就スルニハ今ガ千載一遇ノ好機ナルコト

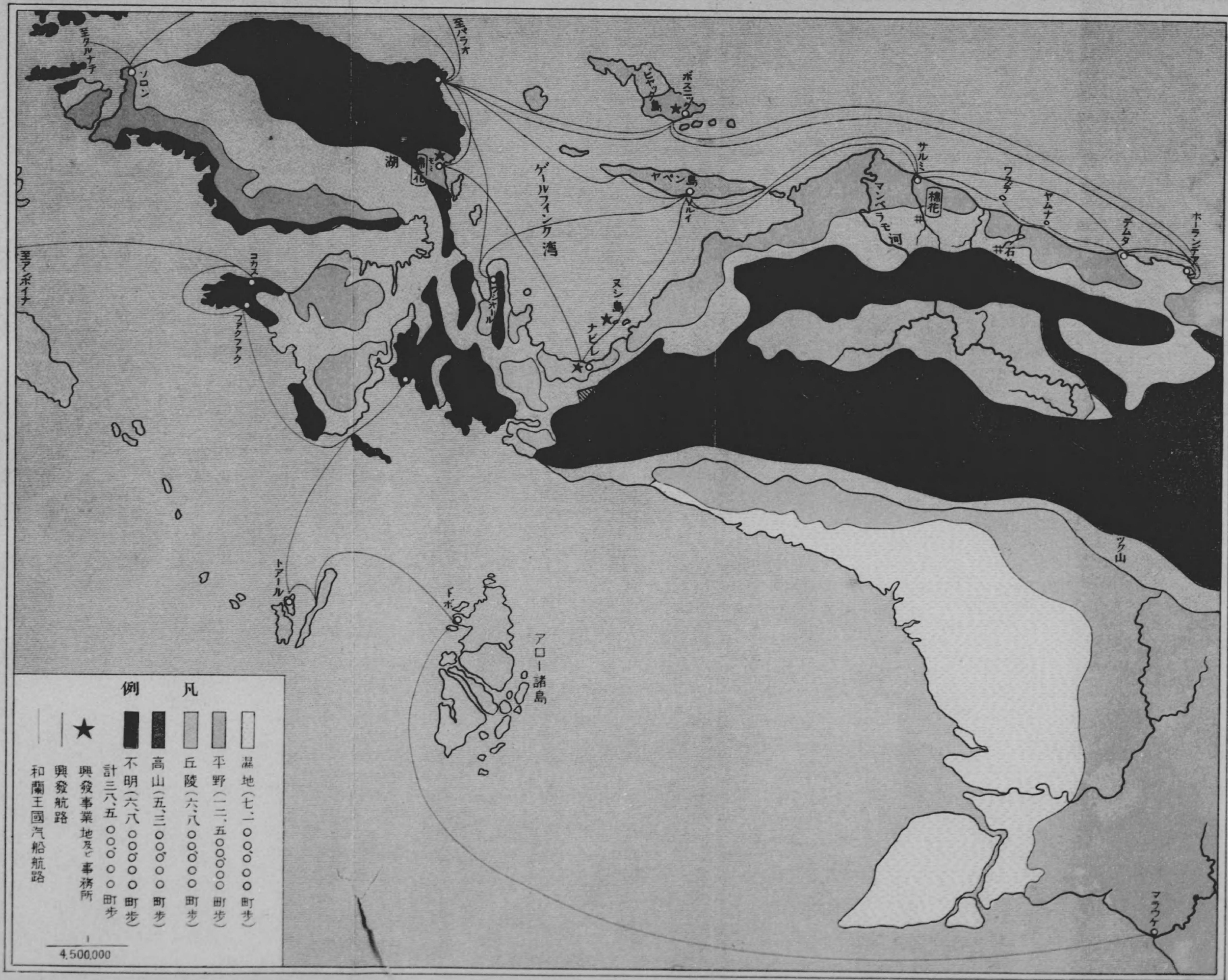
曩ニ國際聯盟ノ脫退ヲ賭シ滿洲國ヲ建設シテ北方問題ヲ解決シタル我國ハ、更ニ茲ニ千載一遇ノ好機ニ際會シテ南方問題ヲモ解決スルヲ得バ、熱溫寒ノ三帶ニ平均ニ跨リ國力無双ノ大帝國ヲ實現シ昭和維新ノ大業ヲ成就スルコトヲ得ベシ、而シテ或ハ此ノ爲メニハ英國トノ折衝ヲ免レザルコトアルヤモ測リ難シト雖モ、印度ノ獨立運動ヲ控ヘタル英國ノ立場ハ相當困難ニシテ場合ニ依リテハ亞細亞ヨリ退却スルノ外ナカルベク、其他世界各國ノ現狀ヲ見ルニ歐羅巴諸國ハ何レモ國內ノ疲弊相互ノ對立ニ逐ハレ聯盟ノ檻内ニ於テ遠吠ヲ送

ルニ過ギザルベク、露國ハ物資ノ窮乏ト内亂ノ潜伏ヲ
 虞レ米國ハ一千万人以上ノ失業者ト年四十億弗ニ達ス
 ル赤字財政ヲ擁シ、共ニ進ンデ外國ト事ヲ構フルガ如
 キ立場ニ在ルモノニアラズ、斯ク觀ジ來レバ總ユル條
 件ニ於テ日本ノ大南洋進出ハ正ニ千載一遇ノ好機ニ惠
 マレタルモノト見ザルベカラズ。

蘭領ニューギニア略圖



蘭領ニューギニア略圖

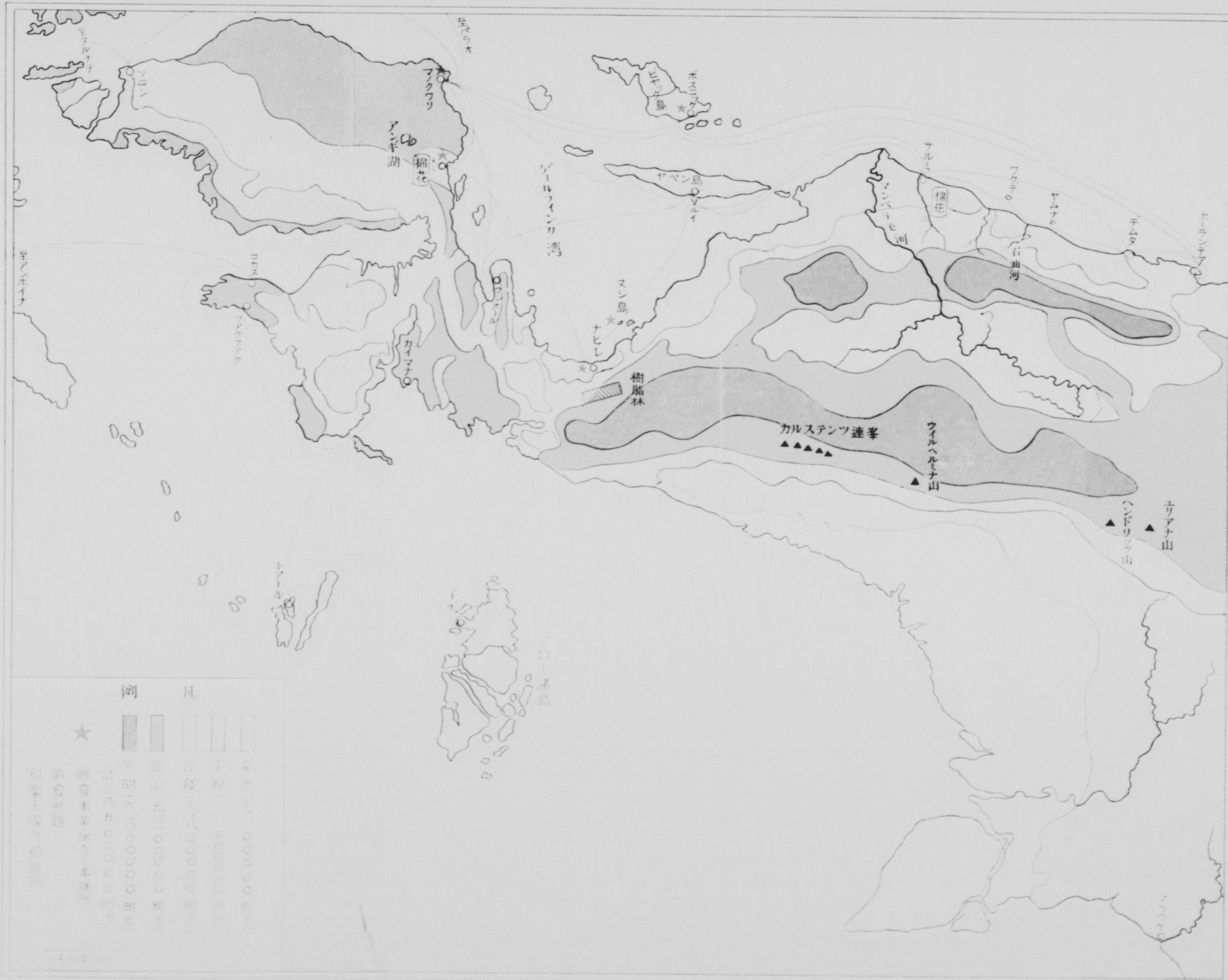


- | 例 | 凡 |
|---|---------------|
| ★ | 湿地(七、二〇〇〇〇町歩) |
| — | 平野(二、五〇〇〇〇町歩) |
| — | 丘陵(六、八〇〇〇〇町歩) |
| — | 高山(五、三〇〇〇〇町歩) |
| — | 不明(六、八〇〇〇〇町歩) |
| — | 計三、八、五〇〇〇〇町歩 |

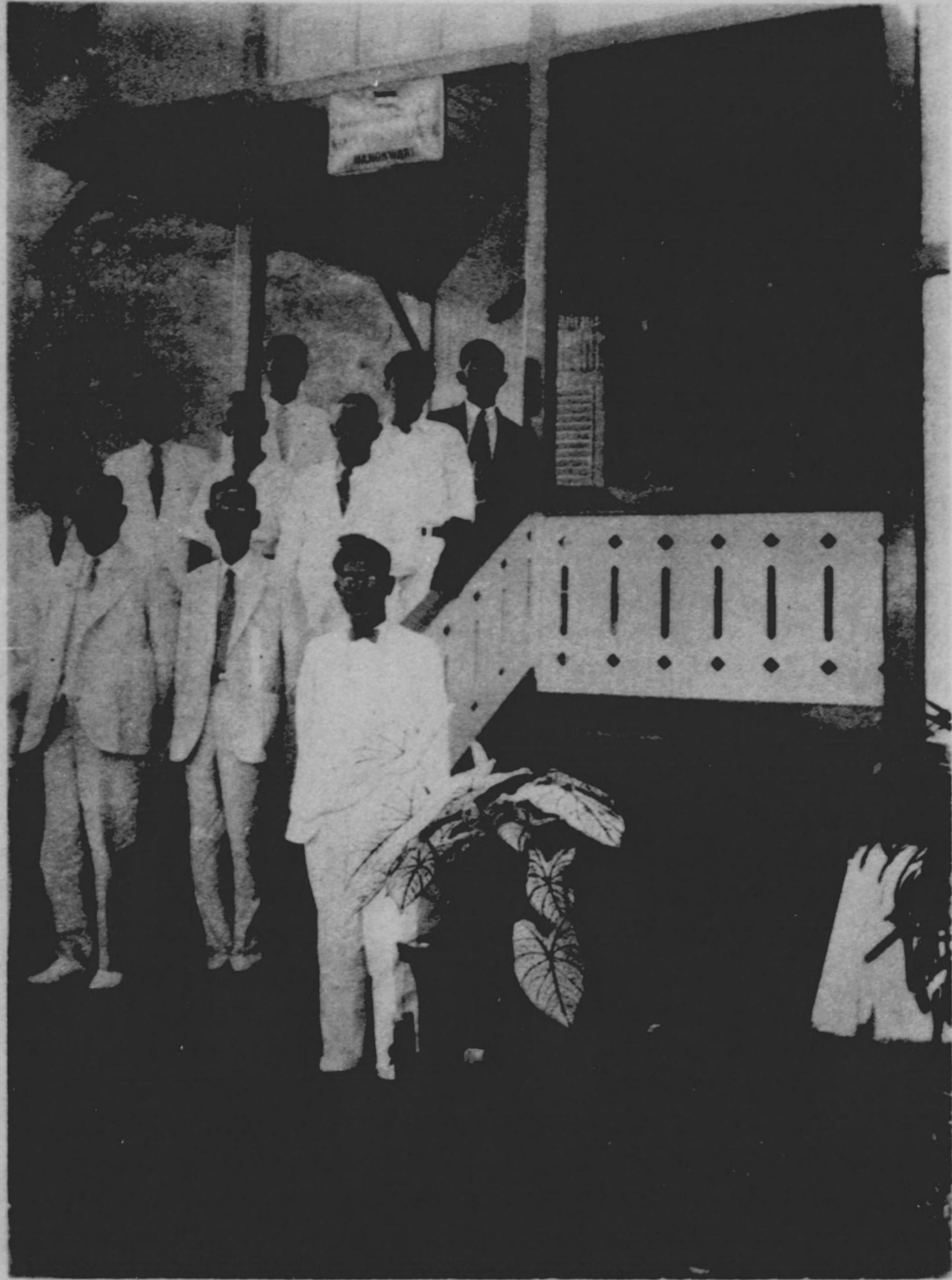
興發航路
和蘭王國汽船航路

4,500,000

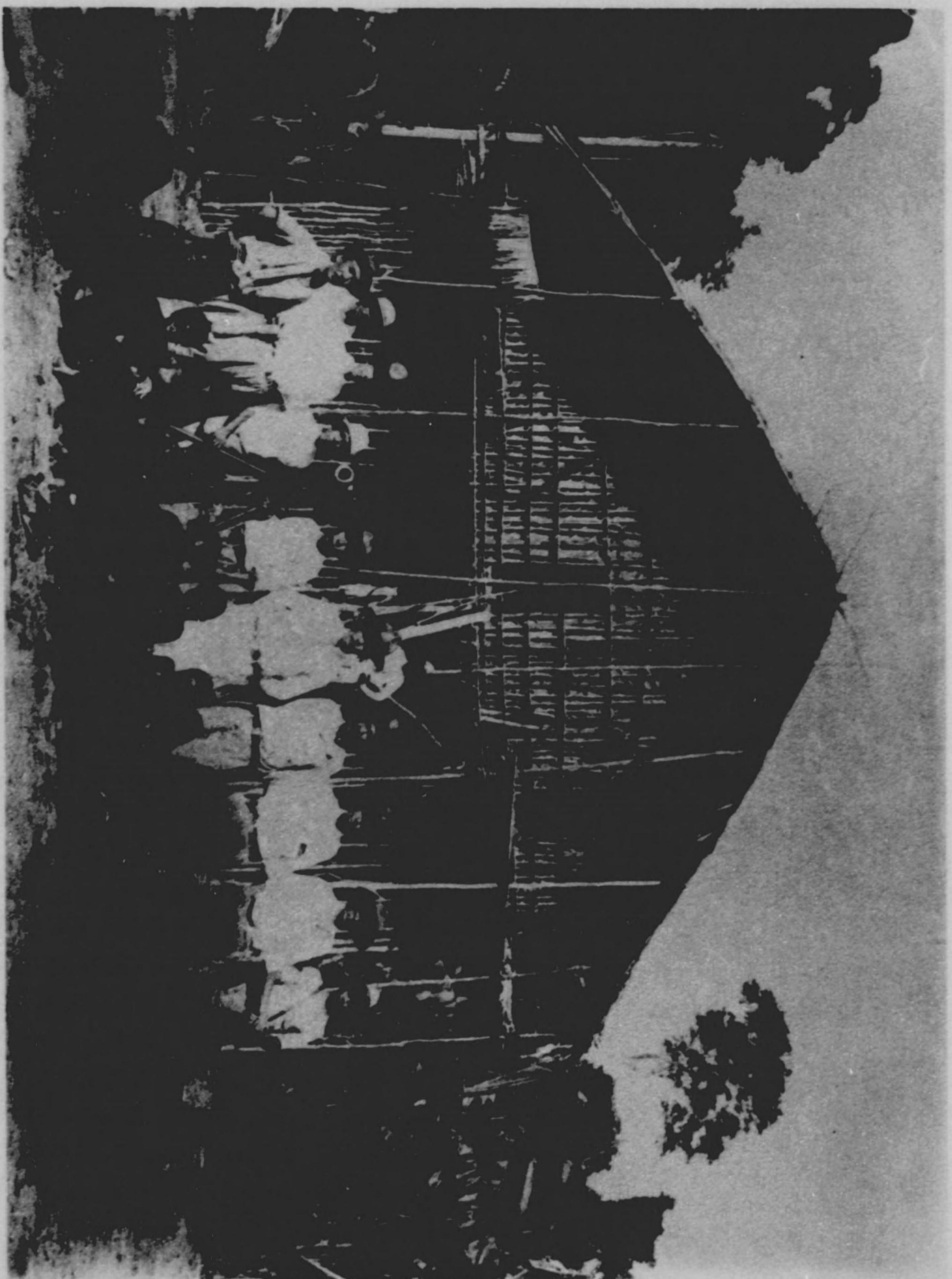
蘭領ニューギニア略圖



例	凡
★	重要地
■	不明(八八〇〇〇町)
■	高山(五二〇〇〇町)
■	丘陵(六八〇〇〇町)
■	平野(五五〇〇〇町)
■	森林(四〇〇〇〇町)
■	沼澤(三〇〇〇〇町)
■	砂漠(二〇〇〇〇町)
■	氷原(一〇〇〇〇町)
■	未詳(五〇〇〇町)
—	主要道路
—	支線道路
—	和蘭土國汽船航路



(者著が端左てつ向列前) 宅社の社當る在にリヲクノマ



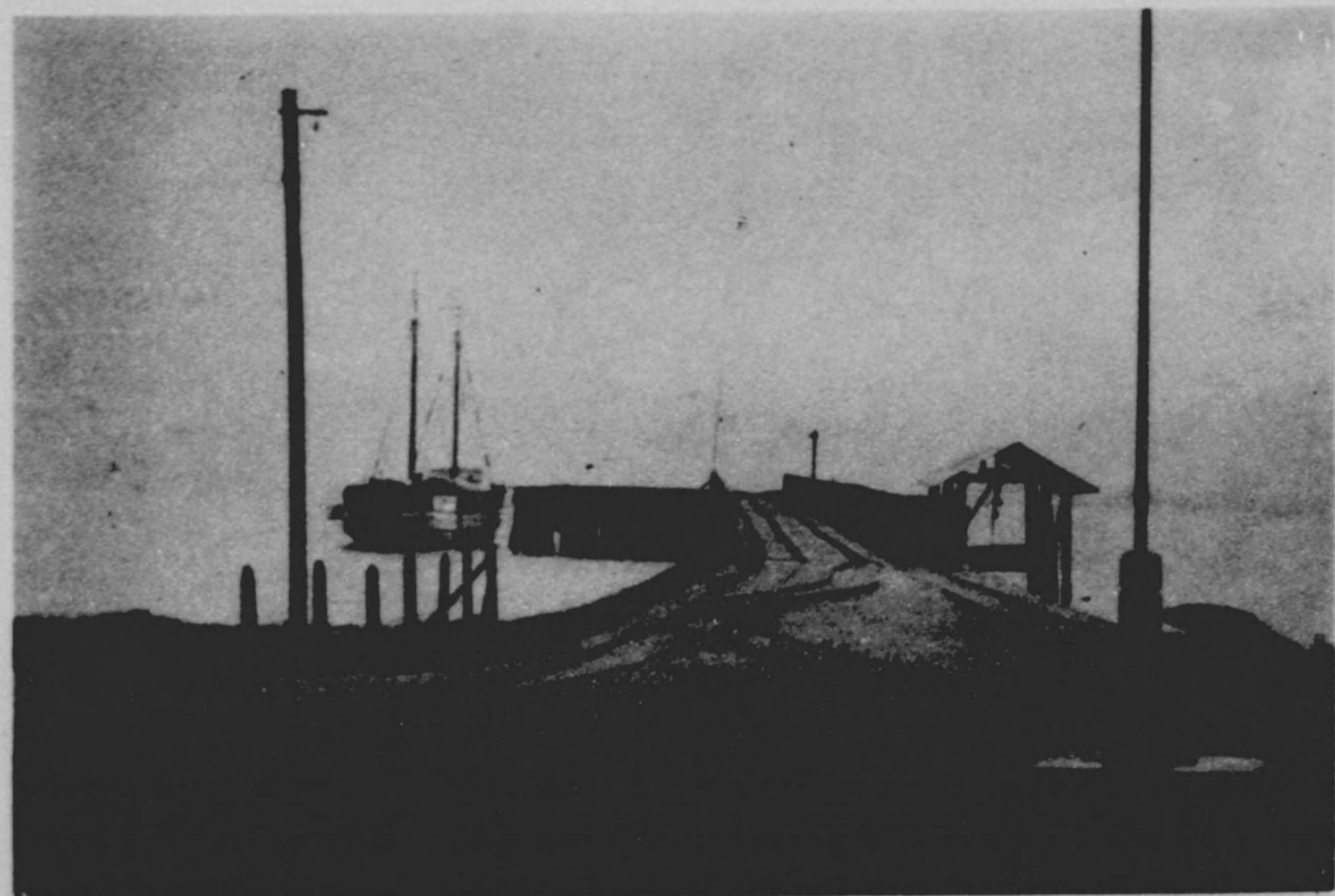
旗ノロキネマと(者着が中央)行一隊査調の者着



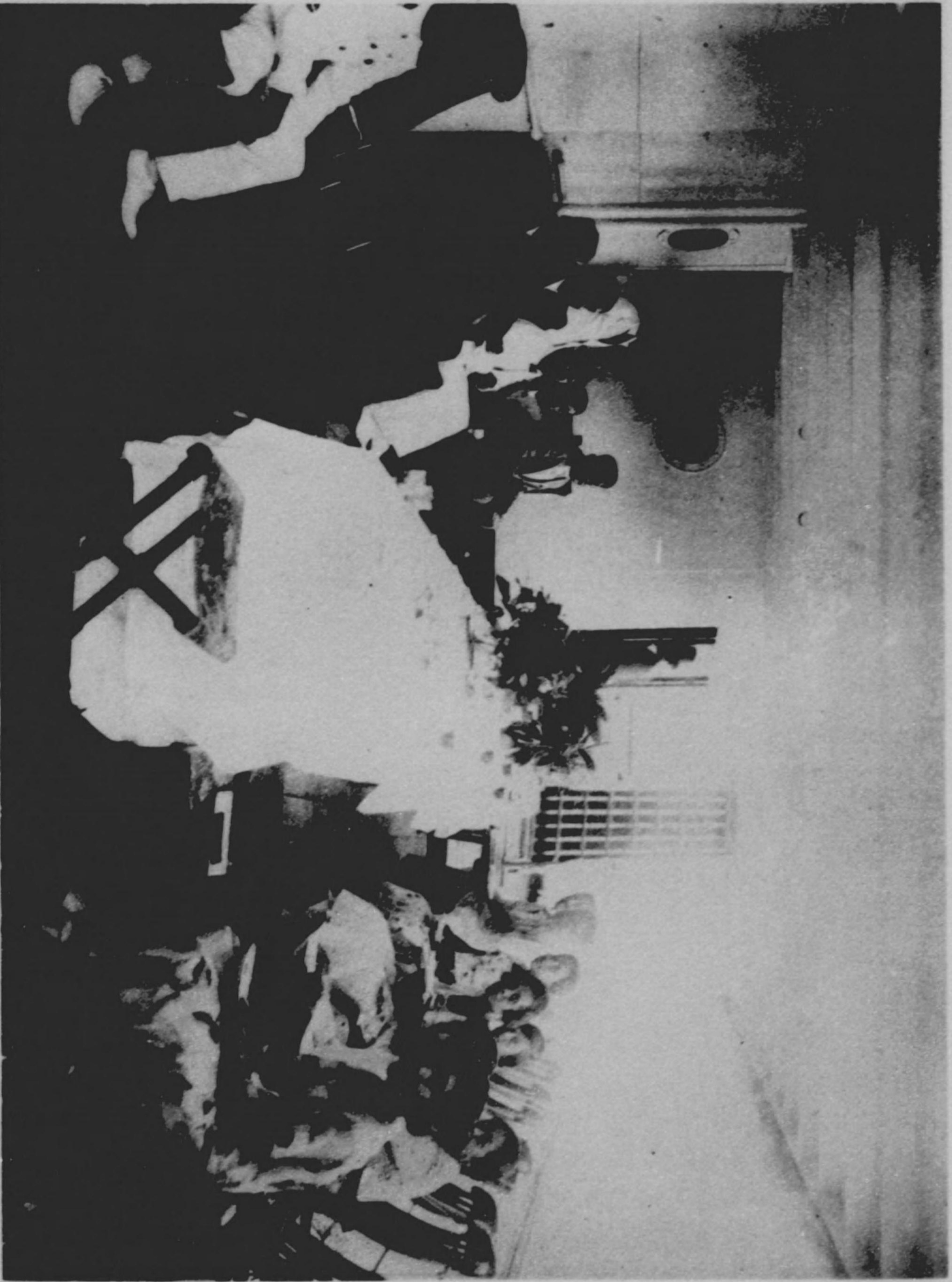
聖地野平ミモ川海クソイノループ



む望を島ムナシマるはた横に面前りよりワクノマ
樹ブーログンマ及樹ンマ



(橋棧製木の間十五百二) 港リワクノマ



ソモソメセレの者著るげ於に上船丸江近内港リソクノマ



(一其) 街市リツクノマ邑首のアニギーユニ北
通大岸海



(二其) 街市リツクノマ邑首のアニギーユニ北
(右てつ向) 局便郵リツクノマと(左てつ向) 所務事社當



マノクワリホテル前より見たるマノクワリ湾



マノクワリ附近爪哇混血移民の開墾地と未開地の境

船シメダシする在に内灣クソイノルルが



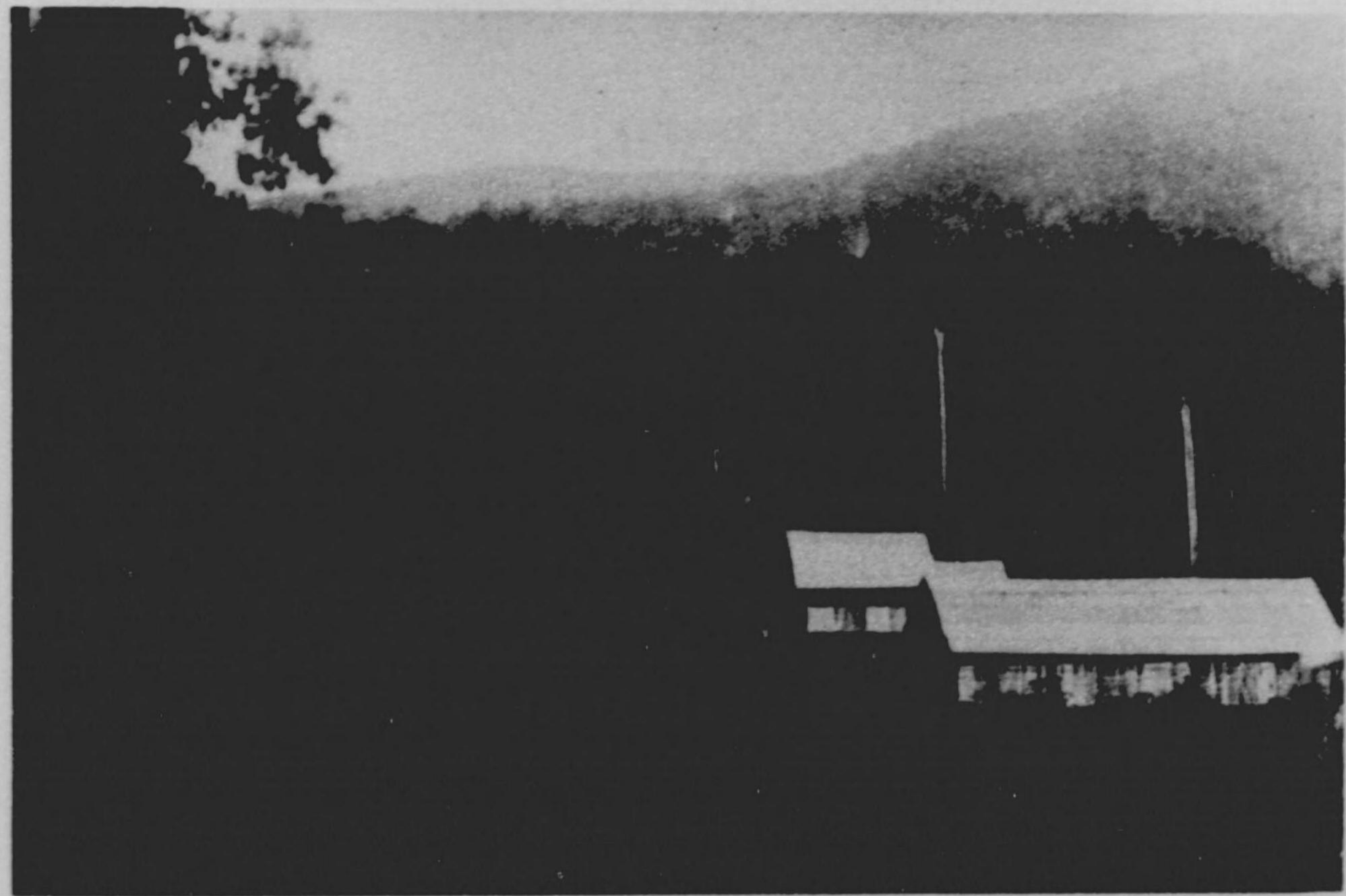


河ルナルエイラミ地奥地利権るけ於にレビナ

會社の權利地に於けるダマル樹(タツピングに依り塗料樹脂を得るもの)



ナビレ奥地當社樹脂林内に建設せる
ダマル樹脂の集積場





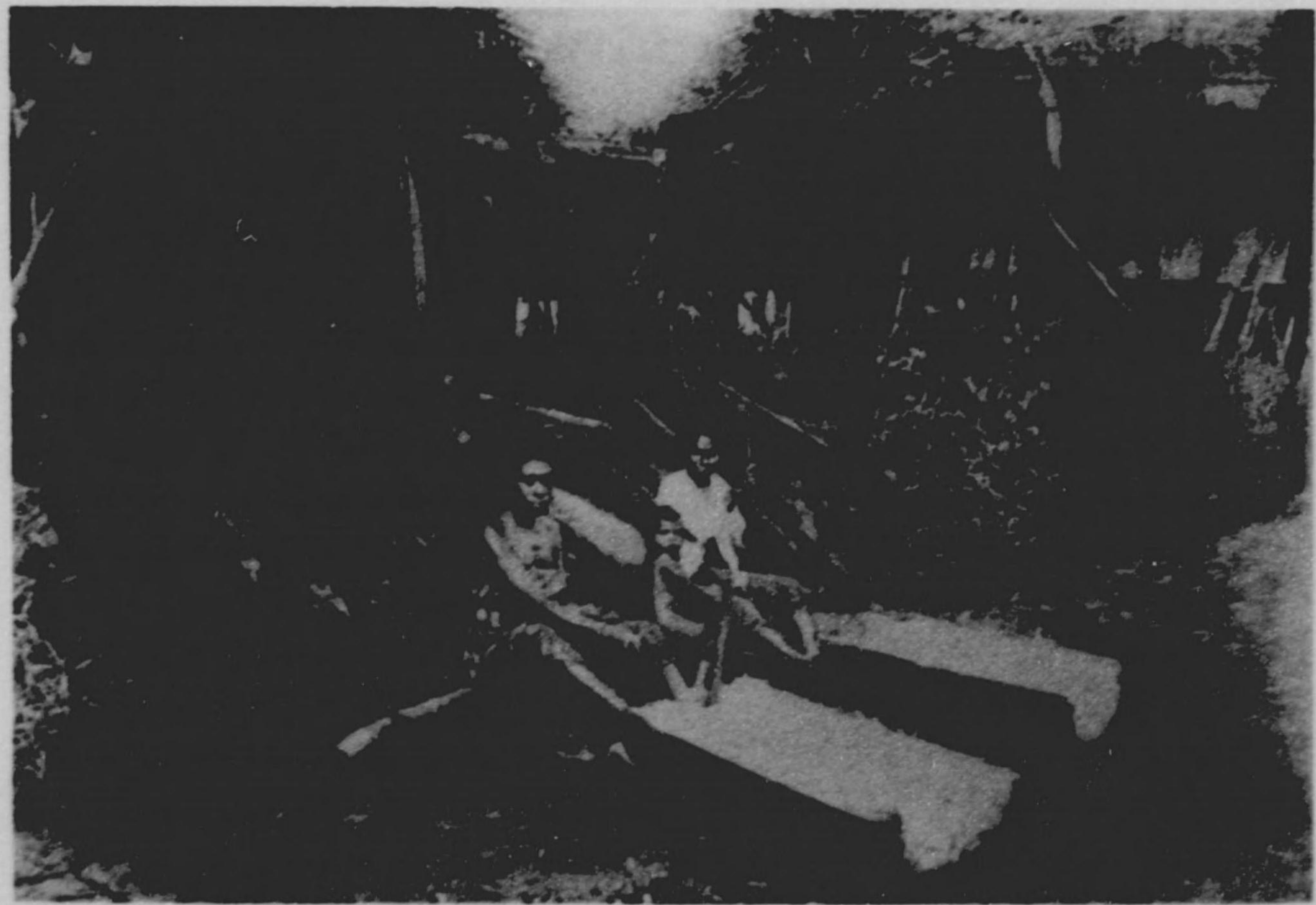
(舍宿人士の社當は屋家)地樂開の社當るけ於に帶地岸海のレピナ



場牧の社當るけ於に帶地岸海のレピナ



梨開の地作棉の社當るけ於に野平ミモ
ぶ及に尺十三が圍周尺五十二さ高は株切の木大



女婦人土るす集採を粉澱てき碎を子椰マサて於に方地ルーオシリ



社有マシ島の前に碇泊せる社船ナピレ丸と大東丸



著者が北ニューギニア調査を行ひたるナピレ丸



む望を島ンペヤの内灣クンイフルーゲリよ丸レピナ船社



舗店の社當る在に島クツニスボ内灣クンイフルーゲ



し多ールガソカサセ息様切ーは蛇産獸猛はにアキギーユニるす屬に糸州深
(ールガソカリ登本は眞竅)



式婚結の族ルーホムヌ アニギーユニ北



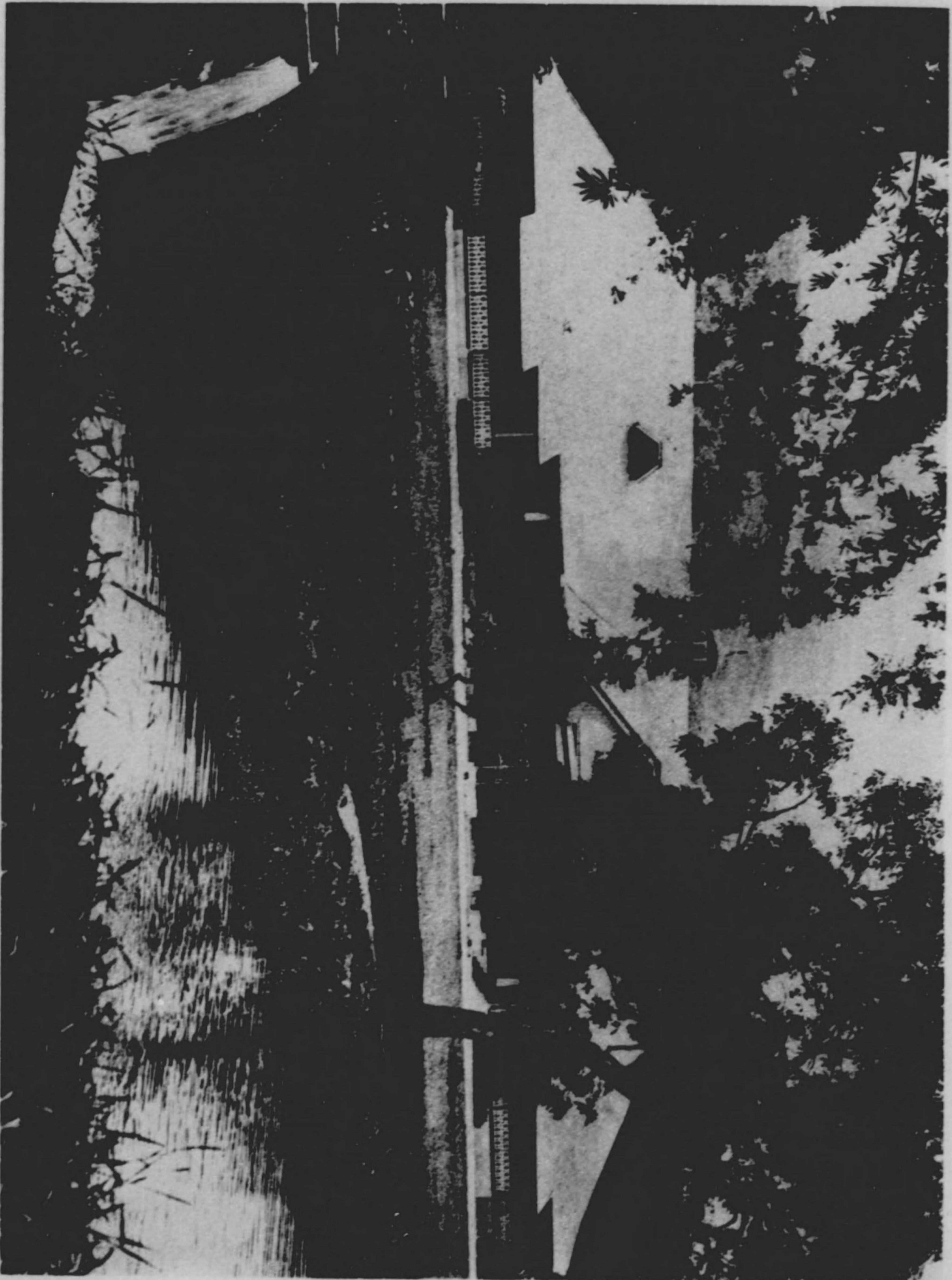
族ンヨキノマアニギーユニ北



女人土の島クツヤビ



邸官督總る在に内園物植ブルフンテイツ
む種を原華へ降き引に機裏の侯王王上憲

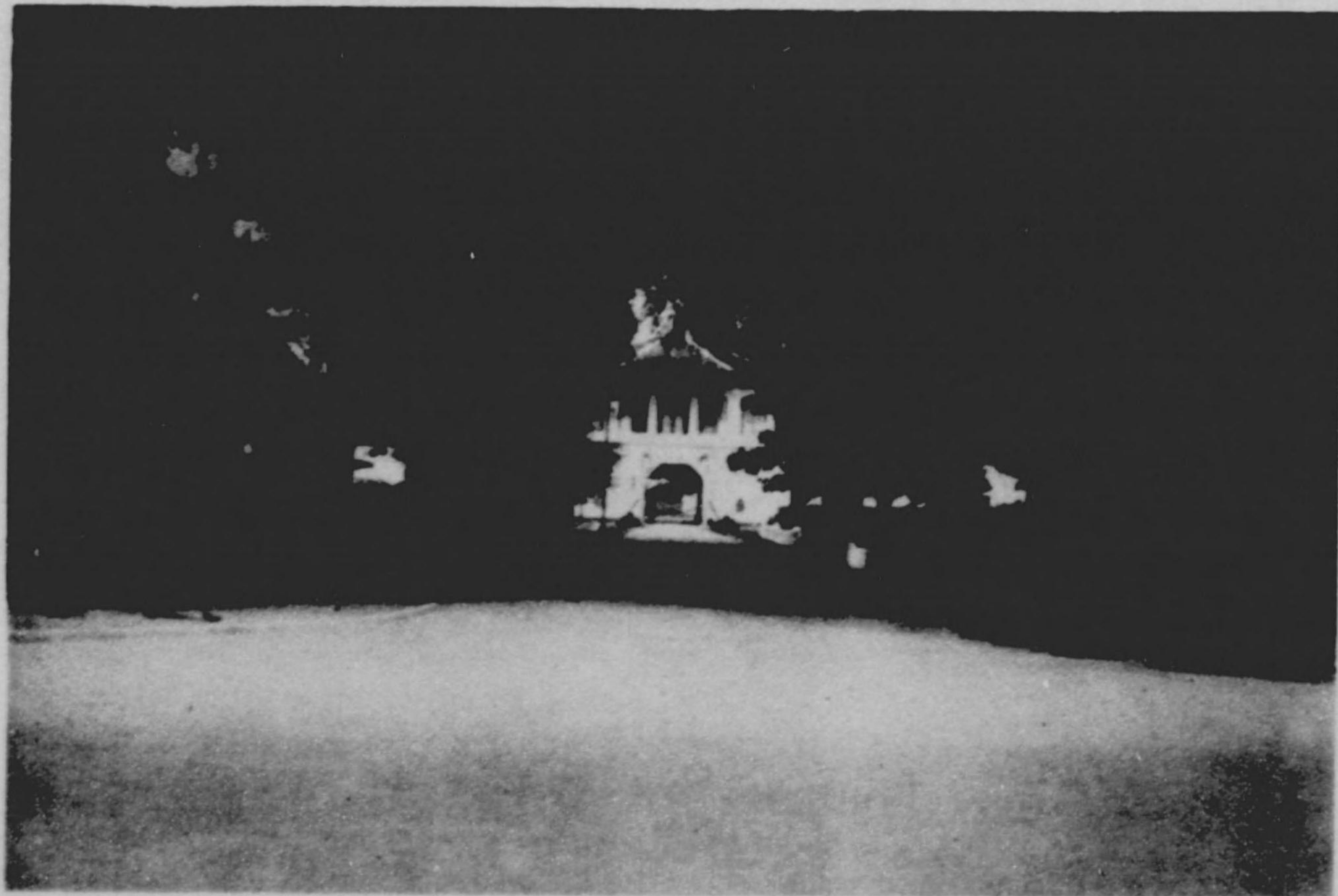


邸 官 督 總 副 ナ イ ホ ヲ グ
す 盡 を 美 善 に 共 園 庭 宅 邸





殿宮の王ロツ哇瓜
は王ロツれらせ遇優は侯土王土るたし順歸に府政蘭和く夙
す持維を政財の殿宮け受を幣國の盾萬十三額年りよ府政蘭和



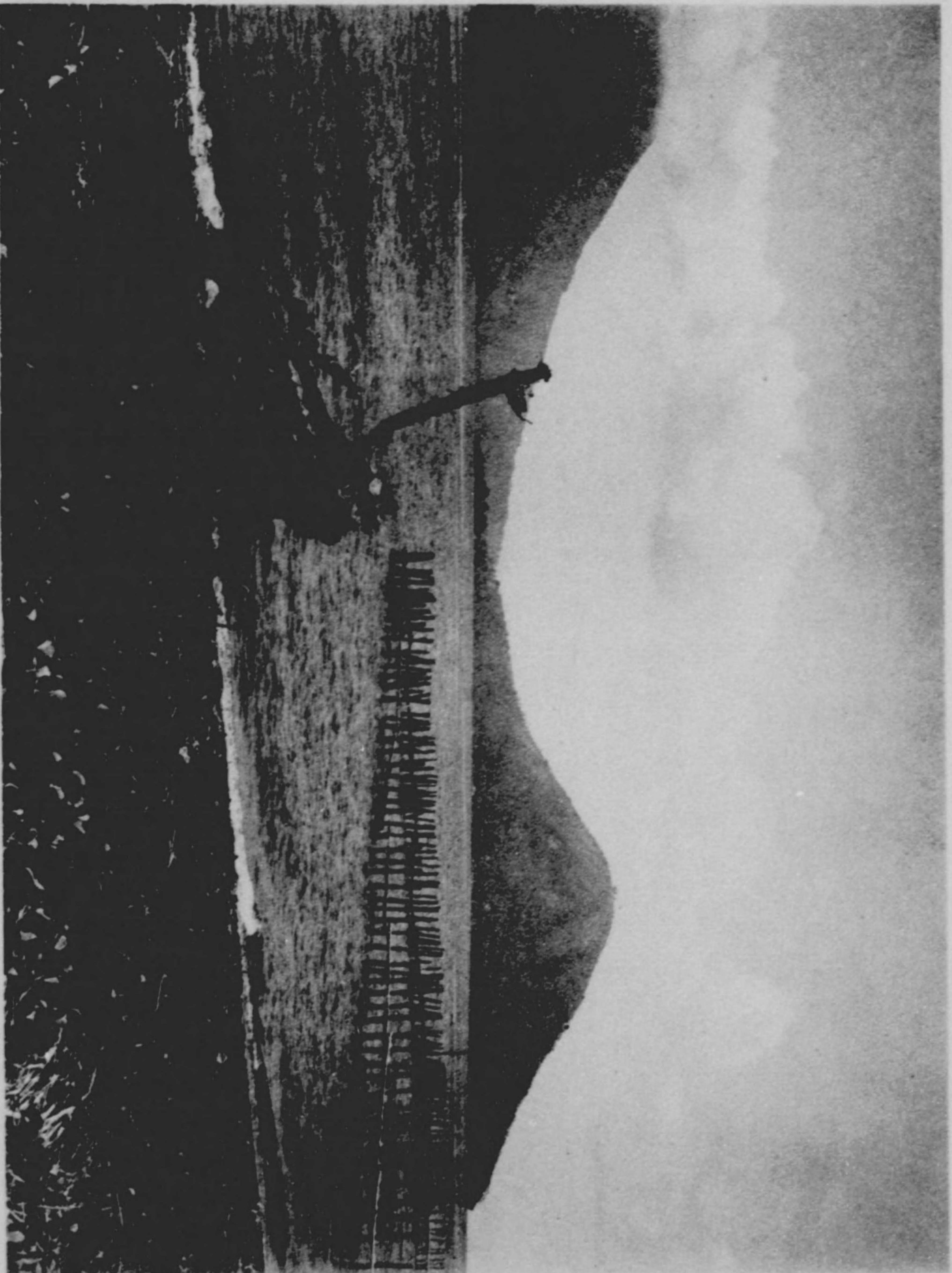
部一の宮王ヤジクヨシ哇瓜
りな一の王土、るらせ遇優りよ府政蘭和



耶王テナルタ
てし廢荒は今も城本の家王るたし配司を方地ラヘマルハ
りな場濯洗は前てしに知子椰は後の耶王。しなも隠る見



舎官(佐少)官武軍屯駐蘭和のテナルタ



鳥レドチ據本の玉レドチるたし服征をアニギニ
求を地上は玉レドチくし忍に地住居島奈てしに山火活現は一りお山大の個ニ
リ在に前直のチカウダは鳥レドチ。リなのもるたし征遠にアニギニててめ

改 版 序

今次の日蘭會商を示標とする新しき南洋問題は決して南洋に於ける單なる貿易戦の問題ではない。和蘭の東印度統治は早晚破綻を免れざるものであつて、之に對して英國が如何なる觸手を南洋に振ひ又日本が如何に之に善處すべきかの歴史的的重大問題である。今一步踏み出すものは南洋を制し後るゝものは此の機會を更に再び何時の日に求め得るや測り得ないことになるのである。日蘭會商を單なる貿易問題として見るさへ認識不足であるのに之を全く對岸の火災の如く又は雲煙過眼視して顧みざる人の尠くないのは遺憾に堪へないことである。

二
蘭領東印度に關する此の急激なる情勢の變化に際會して、豫て私の唱道して居る蘭領ニューギニア買収案も速に實現を要することゝなつたので、買収案の舊稿に其後の新しき事實に依り些少の改修を施し、且つ買収の具體案を追加して急ぎ大方の御示教を仰ぐことにした。問題の重大性に鑑み御清鑑御指導を仰ぐを得ば幸甚之に過ぐるものはないのである。

昭和九年拾月

松 江 春 次

序

我國の現状は開關以來嘗て經驗せざる一大危機に瀕し國內に低迷せる厭ふべき諸問題は果して如何なる歸趨を辿らんとするのであるか想へば寒心に堪へざることの限りである。

現在日本の直面せる危機は夙に數十年の昔より對策を講じ來るべき禍根を忽せにして來たゝめであつて、今や禍根は飛躍的増大を遂げ、農村の危機、中商工業の没落、破局的財政、爲替の崩壞、失業難就職難、思想惡化等々、經濟國難、思想國難の一大渦亂となつて表面化し、殆んど收拾すべからざる困難に立ち至つて居るのである。

茲に導きたる禍根とは何であるか、言ふ迄もなく我國の人口問題

二
であつて、此の問題を解決せざる限り、群り來る難問題は絶対に解決の不可能なることを、國民は一日も速に解明する必要があるのである。

我國の人口は一億に垂んとし、毎年九十萬人宛の増加を告げ、之は何人も知る處であつて、人口問題の急は各方面に叫ばれて居る處であるが、問題の眞實の意味の把握に至つては極めて頼りなく、或は國內對策のみを以て國難を彌縫し得るものと考へ、或は我國にとり植民能率の高からざる滿洲國又はブラジルのみに依つて問題を處理し得るものと考ふる如き迷蒙に安んじて居るのであつて、従つて國民の眞劍さの如きも言ふに足らず、人口問題を口にする人々の説く處も多く肯綮を外れ、古い比喩ながら國民は眞に噴火山上に舞踏し

て居るの觀を禁じ得ないのである。

我國の人口問題は然く悠長なものではないのである。正に舉國的決心を固め、一大英斷に出でざれば、恐るべき事態の到來は必至の勢に在るのであつて、私は茲に問題の持つ重大なる意義を展開し、併せて此の大問題を根本より解決し得る唯一の方策として、和蘭政府と折衝を行ひ、蘭領ニューギニアを買收せよと云ふ劃期的なる提案を試みんとするものである。素より斯る大提案の遂行に就いては、全國民の深き理解と熱意とに俟つに非る限り行はれ難いことであるが、茲に先づ提案の骨子を述べて極めて小範圍の人々に配布し、其の忌憚なき批判を仰がんと欲するのである。

昭和七年十二月

四

蘭領ニューギニアの調査を遂げ東印度政府の
要人と會見して歸國し勿々稿を成す

松 江 春 次

目 次

日本の人口問題……………一

日本は過剰人口を何處に出すべきか……………二

日本の人口問題を解決すべき
ニューギニア……………二五

蘭領ニューギニア買収の可能性……………五九

具體的買収案の提唱……………九五

蘭領ニューギニア買収案

松 江 春 次

日本の人口問題

人口問題は敢て日本のみの問題ではなく、之から正に世界の全人類に與へられ様として居る共同未曾有の大問題であることは、少しく此の方面に心を用ゐる人の何人にも容易に首肯を得る處であると思ふ。經濟的機構の幼稚なる時代に在つては人口の増殖は極め

て緩慢であつて、アフリカ又は南洋の甚しき未開種族の如きに在つては數千年又は數萬年を経過するも人口は殆んど殖えはしない。否、最近の十九世紀末に至る迄は地球上に於ける人口の増加は一向邪魔にされなかつたばかりでなく何の國家に於ても最も歓迎され、人口の増加率を高くすることは其の國家を繁榮に導く何よりも重大な條件として、各國共に總ゆる手段方法を講じて人口の増加を競つたものである。

處が十九世紀は産業革命と驚くべき文化の跳躍とに依つて人類の驚くべき増加が開始され世界の人口は此の一世紀間に八億五千萬から十七億と二倍の激増を遂げ、一二の國家に於ては早くも人口の増加は只喜んでばかりは居られない問題であることが明かにな

つて來た。

更に二十世紀に入つてからは人口増加の勢は拍車を加へられ、統計を基礎とする正確なる推計に於て、今世紀の人口は八十年を以て二倍となる速さを以て増加しつゝあることが明かにされた。即ち十九世紀に於ては百年を以て倍となつたものが今度は八十年を以て倍になるのである。即ち此の勢で進めば西曆二〇一〇年には世界の人口は四十億になり、更に此の率を以て押して行くものとすれば、之から纔か五百年足らずの間に世界の人口は一千億を突破し、左の如き驚くべきものとなるのである。

- 二〇一〇年 四〇億
- 二〇九〇年 八〇億

二一七〇年	一六〇億
二二五〇年	三二〇億
二三三〇年	六四〇億
二四一〇年	一、二八〇億

之は甚だ容易ならざる問題である。勿論世界の人口は之れ以上の加速度を以て殖えるか、或は増加の速度が鈍るかは到底豫測を許さない問題であるけれども、甚だ近い将来に於て地球上に住む全人類は人口に關する一大問題に逢着しなければならぬ運命に在ることだけは判然斷言し得る處である。其の解決に就いては諸國家が神に近い公明な協調を行はない限り、必然此の前の世界大戦を數倍數十倍する慘禍が繰り返へさるべきことも亦當然覺悟しなければ

ならない處である。

世界の人口は一九三〇年に於て二十億を裕に突破して終つたが、其の大陸別の分布状態を示せば左の通りである。

大陸	面積 (平方千)	人口 (千人)	密度 (平方千に付)
アジア	四二、〇〇〇	一、二二四、四〇〇	二七
ヨーロッパ	九、五〇〇	四八四、八〇〇	五一
北アメリカ	二一、八〇〇	一六七、二〇〇	八
南アメリカ	一八、八〇〇	八一、〇〇〇	四
アフリカ	二八、八〇〇	一四二、一〇〇	五
太平洋	九、〇〇〇	九、五〇〇	一
總數	一二九、九〇〇	二、〇〇九、〇〇〇	一五

即ち歐羅巴と濠洲とでは人口密度が五十倍も違ふ。更に之を國別

に見るとき人口密度の高い國と低い國の間には全く均衡が取れて居ないのであつて、其の修正が今後必然的に大問題となることは一目で看取される處である。

人口密度の高い國

人口密度の低い國

白耳義	二六七人	ブラジル	五人
和蘭	二四三	アルゼンチン	五人
日本本土	一七一	ボルネオ	五人
英吉利	一四六	支那の外領	五人
獨逸	一三三	露領アジア	二人
伊太利	一三三	カナダ	一人

チエッコスロバキア一〇五 濠洲 一
 瑞 西 九九 ニューギニア 一
 即ち白耳義、和蘭、日本等はカナダ、濠洲等に比し百五六十倍乃至二百五六十倍にも達する窮屈な生活をして居るのである。

勿論國民の生活標準は色々に異り生産力も違ふから窮屈非窮屈と云ふことは極めて相對的な問題であつて、或國民國土には稠密に過ぎる人口も他の國民國土には一向稠密でないと云ふことはある。然しながら夫々の生活標準及び生産力から割り出せば其の國に最も適度な人口と云ふものは略々決定し得る譯で、此の點以下に人口が過少であつては自然の開發が出来ないで、人間が自然から壓迫されることになり、又此の點を超えて人口が過剰であつては、生存競争

が次第に苛烈になつて生活が低下し文化が後退する。即ち國民の生活を豊富にし社會の發展力を維持するためには、過剩でもなければ過少でもない丁度最も適度な人口が必要であつて、之が即ち最适度人口と稱せられるものである。

最适度人口は住民の生活標準と生産力とを基準にして概略を決定するのであるが我内地に就いては此の最适度人口は約四千萬人前後であらうと推算されて居る。故に内地の人口が既に六千萬人を突破し更に年々九十萬人前後の増加を見つゝあることは、最适度人口を五割以上も超過し更に年々其の増加率を擴大しつゝあるものであつて、此の結果は必然的に國民生活の壓迫となつて現れ、國家の財政難、農村及び都市の疲弊、產業界の萎微沈滯、失業問題、思想問題

等々各方面の難問題となつて現れるのである。

即ち我國に於ける一切の難問題は、最适度人口を五割も超過して居ることから生ずるのである。故に此の過剩人口の修正を行はない限り、一切の對策は根本的の對策とは爲り得ないのである。國民は此の事實を判然と自覺して海外發展に對する斷乎たる覺悟を樹立すべきである。即ち現下講究せられつゝある農村救濟或は商工業救濟、思想問題對策等の所謂非常時匡救對策の如き素より悉く緊急のものたること論を俟たない處であるけれども、根本的原因が過剩人口に存するのであるから、先づ之の修正を行はない限り、如何なる對策も根本的の效果は擧げ難いのである。

實に日本の人口問題は世界の重要問題であつて、其の解決は全世

界の注目を集めつゝある處で、米國の如きに於ては裏面に種々政策的意味を藏するものとは言へ「日本の過剰人口」と云ふ懸賞問題が出され、其の應募者中には澤山の中學生が入つて居たと云ふ程一般に注目されて居るのである。然るに當の日本に於ては此の問題に對する理解及び熱誠は甚だ稀薄なものであつて、本問題の眞髓には何等觸れて居ない様に見受けられるのは實に慨歎に堪へないこと、言はなければならぬ。

此の國民的冷淡は大半問題の眞意義を把握せざる無知より來るものと考へられるのであつて、此の理解の徹底を期するためには今後總ゆる施設を講ずべきものである。之に就いては尙ほ言ふべきことは多いが次の問題に移ることにする。

日本は過剰人口を何處に出すべきか

我國の人口問題は亦其の解決の方法に於て絶大なる困難を伴ふものたることを覺悟しなければならぬものである。産兒制限の如き消極的なる方策を捨て、活路を海外に見出さんとするとき、有力なる植民地を持たざる吾人は非常なる困難に逢着せざるを得ないのである。之れ實に吾人が茲に果敢なる一大植民國策の斷行を提案する所以である。

世界に於ける人口過剰國のうち白耳義は其の本國こそ小なれ、ア

フリカには本國の面積に八十倍し豊富なる鑛脈を藏するコンゴ
自由國を有し同じく和蘭は本國の面積に六十倍し來るべき世界經
濟の中心舞臺を以て目さるゝ南洋の寶庫を有して居る。英國に至
つては殆んど無人に等しき濠洲及びカナダの二大陸を有し人口問
題の如きに嘗て考慮を費したることなき幸福なる國民である。斯
くして日本と稍共通の苦惱を有するものは獨逸及び伊太利の二國
であるが、日本は彼等よりも三割の人口過剰にあり、而も我内地は地
勢險峻極めて平野に乏しく、開拓面積は僅かに全面積の十五%に過
ぎない。又天然資源も貧弱であつて、其の人口問題の急迫せること
は到底彼等の比ではないのである。

日本が人口問題の解決を行はんとするとき逢着すべき第一の困

難は人口問題に對する從來の國際的偏見を根本的に打破しなけれ
ばならないことである。日本の如きは人口問題解決のためにはど
うしても外國の領土に發展するより外に途がないのであるが、從來
の國際的偏見に従へば、之は直ちに侵略であつて世界の平和を害す
るものであると言ふ。さうして斯う云ふ非難を出す方の側に於て
は例へば白濠主義と云ふ様な看板を掲げ、一方糝に人口一人と云ふ
様な無人の大陸を閉鎖して野獸野禽の跳梁に委せ、過剰でどうにも
ならない人口を何處かに出し度いと云ふ痛切な他國民の要求をば
蹂躪して恥づる處がないのである。吾人は正論に依つて斯る偏見
を打破しなければならぬのである。又他國の領土への發展は其
の領有國の利益を侵害すると云ふ様なことも根本的に間違つた考

であつて、兩者の協調に依つて兩者の利益を圓滿に助長して行くことは人類の進歩幸福のため最も望ましいことである筈である。之に就いては歐米に於いても極めて公正な議論の行はれて居るのを散見するのは甚だ氣強いこととて、例へばウイリアム・ダウソンの「英國の前途と平和」の中には次の様な意見が述べられてある。

世界の空漠未開の地を過剰人口のホームとする要求は容れねばならぬ。機會均等主義は民族自決主義と共に世界大戰が人類に與へた有力なる刺戟である。英國民がその種族の永續的中心的領土に力を注ぐべきを當然の義務と信ずるものであるが、若し此等の領土に餘裕の存する場合には過去の偏見を棄て、歐洲の過剰人口を收容すべきであると思ふ。

又ウイルキンソン氏の過剰人口戦争必然説には同一意見が更に強調されて

一方人口過剰で難澁せる國があるのに他方には人口稀薄、土地廣きに拘らず其の住民は貪慾にして他國人を入れぬ國がありとすれば、其の結果は勢ひ戦争となるの外はない。過去世紀を通じて戦争に依りて人口の調整された例は極めて多いが、過去五世紀以來は機械の發明や新大陸の發見に依り大いに食物供給を増大することが出來たので餘り軍事的行動に訴へる必要はなかつた。然るに今日は増加率ますます高きを加へて、而も外國貿易と海外移住の自由は却つて甚だしく制限されて居るから此の場合飢ゑたる人多き國家が滿腹せる傲慢な少數人の國家に對して執る

最後の手段は戦鬪の外にない。英國は自ら開拓し得る見込なきも其の植民地を獨逸に割譲しない。白耳義もそのコンゴを一切の礦物が採掘し盡きる迄は賣らうとはせず、葡萄牙も其のアフリカ植民地を手放さず、佛蘭西もシリア、チュニス並に其のアフリカ植民地の何れをも伊太利へ與へやうとはしない。

中米及び南米の政治が如何程に無能で、且つ其の土地が如何程に多く荒廢して居てもモンロー主義により日本をして殆ど一指も染めさせない。日本が可耕地乏しくして食料品不足を告げて居ても、濠洲は依然白人濠洲政策を固守して居る。此等の思ひ遣りなき不遜の態度は結局土地狭くして自然財源乏しく且つ人間餘りある國々に挑戦して居るとさへ見られぬことはない。今後

五十年以内に英佛葡のアフリカ植民地は必ず獨逸及び伊太利に依りて問題を提起さるべく、又中米南米濠洲の移民に關しても日本並に其他の國より何等かの異議が申込まるゝであらう。勿論國際關係の緊密な今後の世界に侵略的の戦争準備は容易に出来さうもないから、先づ當分は産兒制限に依り人口過剩の緩和を企てるだらうが、此の様に平和的或は消極的の政策が果して何時迄持續し得るやは全く豫斷し得る限りでない。

と述べられて居る。さうして此の考こそは今後に於ける世界の人口問題の赴くべき方向を明示して居るものである。

日本が人口問題の解決を試みるに當り、第二に逢著すべき困難は數千萬に達する過剩人口を出すべき最大の適地を何處に見出すか

と云ふことである。植民と云ふことは實に六ヶ敷い問題であつて重要な條件が完備しなければ成功は望まれないのである。例へば和蘭は殆んど廣大無邊な東印度の寶庫を所有して居るにも拘らず本國に於ては三十年計畫を以てツイデルゼーの埋立などを遣つて居るのである。之に依つても植民の困難と云ふものが如何に大きいものであるか判るのである。況して自國の植民地を持たざる日本に於ては之は最も慎重なる國民的研究を要する問題であつて、之に就いて先づ一般に考へられるのは新興の滿洲國と南米のブラジルとであらう。

滿洲國は貴重なる生命と數億の金を投じた日本の絶對的生命線であるから、氣候の良否などを論じて居る悠長な處てはなく、是非何

とかして此處に大なる移民を送らなければならぬのであるが、寒冷地帯は熱帶の様に山野に食物が充満して居る處とは違ふから、行きさへすれば其の日から食物にだけは不自由しないと云ふ様なことは望めなく住居には耐寒設備を要し衣服も簡單なものでは濟まされず即ち移住には非常な困難を伴ふことを覺悟しなければならぬのである。即ち初めから多大の資金を要し、又即效が擧げ難い。それに滿洲國には生活程度の極めて低い住民が相當居住して居て、尙ほ支那人がどしどし流入して來るから、生活程度の高い日本の移民は一層の苦戦になる。之はどうしても日本の絶對的生命線のため、の植民地で犠牲の附き纏ふことは相當期間己むを得ぬのである。ブラジルは滿洲國を除いては日本移民を歓迎して呉れる唯一の

國家であつたが最近それも門戸を閉鎖して終つた。ブラジルは南米寶庫の中央を占め種々な好條件に恵まれて居るのであるが、遺憾ながら日本からは餘りに距離が遠過ぎて植民地としての第一條件を缺いて居る。殊に之からの物騒な國際關係に處する上に於ては海外發展地も母國と有機的一體の經濟的活動を營み得るものでなければ力にならないのであるから、唯過剩人口を移すと云ふだけの消極的意味だけならば兎も角日本の更生發展と云ふ様な立場からは遺憾ながらどうしても適地とは云ひ兼ねるのである。

即ち重ねて云ふならば滿洲國は氣候の寒冷と生活程度低き多數の先住民族のために、又ブラジルは距離遠きことのために共に我國に對しては植民能率の高からざる地方である。之を國家の非常な

る努力に依つて補つていつても日本は現状に於てすら海外に出す必要のある二千萬の人口を有するのであるから、斯る大數を植民能率の高からざる地方に出さんとする事だけでは不充分である。然らば我國の人口問題は眞に憂慮すべき事態に在るのであるまいか。

然るに茲に絶好なる解決の鍵があるのである。吾人は衷心神に感謝しなければならぬのであるが、それは日本の直南二千裡に横たはるニューギニアであつて、此のニューギニアこそは、滿洲國及びブラジルに缺けたる處の條件を悉く具備し、我國民にとり絶對他に求むべからざる最高無二の發展地と思はるゝが故に、吾人は茲に蘭領ニューギニア四十萬平方籽(我内地は本島、北海島、九州、四國を併せ

て三十八萬平方杆の買収を斷行して、火急なる我國の人口問題を一舉に解決すべき提案を試みんとするものであるが、ニューギニアの紹介に移るに先立ち、我國民のうち數千萬の人口を海外に出さんとするに就いては其の移住地は果して如何なる條件を具備しなければならぬものであるか、試みに其の條件と思はるゝものを列挙して見やう。

我國民の大移住地たるに必要な要素

- 一、面積が宏濶で人口が稀薄なこと。
- 二、氣候風土が日本人の居住に適すること、只耐へ得るばかりでなく適することが必要である。

三、日本から距離の近いこと。

四、地味が日本よりも肥沃で無肥料を以て希望作物が出来ること。

五、日本と貿易関係を有する農作物、工産物、礦物等が出來、此等のものが日本の輸入品でそれを移民及び我が經營者の手により日本に入れ、經濟的統一活動を營み得ること。

六、先住民族に對して勞力其他の問題を起さず、之を日本化し得ること。

七、日本政府の威權が相當行はれる土地であること。

等ではあるまいか。滿洲國及びブラジルが此等の諸條件を全部具備して居るものでないことは明かである。然らばニューギニアはどうであらうか。

日本の人口問題を解決すべき

ニューギニア

先づニューギニア着目の経過から述べんに、吾人は大正十年の末から十二年間、南洋群島即ち南洋廳下諸島の開拓に従事し南洋の開拓に就いては種々の貴重なる経験を體得したのである。

吾人は群島に於て製糖事業を主とし其他水産、澱粉、燐礦等の諸事業に依る拓殖を進め、既に一萬八千人(附隨する分を併せれば二萬五千餘人)の移民を入れ、群島は年額一千數百萬圓の國富を擧げ得るに

至り、南洋廳は設立以來十年を以て財政の獨立を達成したのである。我國の植民地中他に財政の獨立を行つて居るのは臺灣を數ふるのみであるから、之は非常なる成功と言はなければならぬ。南洋群島の如きは廣漠たる太平洋上に浮ぶ針頭大の小島群であつて、之を開拓して經濟的價値を擧ぐべきが如きことは蓋し何人も期待した處ではなく、それが僅々十年にして財政の獨立を達成したることは一の驚異とも見られる處であらうが、退いて其の理由を考ふるときは之は何等驚異ではないのであつて、臺灣と云ひ南洋と云ひ南方の熱帶植民地は土地の生育力に優れ、寒溫帶に比し數倍の光と熱とに恵まれ、自然に生物を育て、人口を養ふことに出來て居るが故に斯く急速なる植民的發展を遂ぐることが出來るのである。

之は國民の大いに考へなければならぬ問題である。朝鮮、樺太或はそれ以北の寒冷地帯は一年のうち三分の一乃至二分の一にも亙つて全く活動を停止しなければならぬ處である。斯う云ふ地方と年中旺盛なる生育力に恵まれた南方に對する植民の難易は問はずして明かである。然らば兎もすれば北方にのみ伸びんとして來た從來の我國の植民政策は非常に不經濟なものではあるまいか。之れ即ち吾人をしてニューギニアに注目せしめた根本の動機である。

そこで群島の經營に主力を注ぎ乍らも絶えず機會を窺つて居たのであるが、昭和六年偶々絶好の機會に恵まれ、蘭領ニューギニアに於て獨逸會社の經營して居た事業權を買収することが出來た。其

の権利は蘭領ニューギニアに於ても尤も樞要地に當るゲールフインク灣の最奥部に臨むナビレ地方に於て三萬餘町歩に達するコンセツション及びヌシ島全部並に灣口のビヤツク島に於ける店舗貿易權等であるが、吾人は其の権利の果して有利なりや否や等は深く問ふ處なく、専ら先づニューギニアに足場を造ることを主眼としたのである。

權利買収後は直ちに數名の社員を先發して調査に當らしめ、更に昭和七年の夏余自ら數名の社員を引卒してニューギニアに渡り（一行に三名の政府派遣員を加ふ、北部ニューギニアの首都マノクワリ（首都と云ふも人口に三百五十））を起點として、ゲールフインク灣の全沿岸を調査し、コンセツションの内容及びニューギニア資源の概貌を確め起業計畫を

決定したのであつて、其後僅に二箇年を経過したるに過ぎないのであるが、當社のニューギニア事業の現状は左の如き發展を示して居るのである。

一、ナビルに於けるコンセツションはダマールと稱する大木より塗料樹脂の採集を行ふ權利であつて、ダマール樹の數萬本密生せる此のコンセツションの如きは非常なる資源であつて、當社は獨逸會社の失敗に鑑み、河川搬出の方法を完成し、土人勞力を使役して着々採集搬出を行ふに至つたから、遠からず我國の塗料原料の輸入の大半は防遏し得るものと思ふ。

二、ナビルの海岸地方に於て將來に於けるニューギニア開拓の準備として各種の熱帶作物に對する栽培研究を行つて居るが、玉

蜀黍、カボック、タピオカ、胡麻、カ、オ等は全く豫想を超越する優良な成績を擧げて居る。

三、ゲールフィンク灣の西岸モミ地方に於ては七百五十エーカーの棉花栽培を進めて居る棉花の成績は理想的である。尙ほ此處には土人勞力の外に邦農數戸を試験的に入れてあるが、健康状態其他申分ない。

四、昭和八年礦物技術者を派遣してニューギニアの北海岸一帯を調査せしめ、豫て和蘭陸軍探險隊の報告書にある大油田の全貌を明かにし、其他多くの貴重なる收穫を得た。

五、内地との連絡は南洋廳の所在地たるパラオ迄は郵船會社の南洋航路に依り、それから先は社有船を以て連絡して居る。此の

ために二百五十噸のぬし丸を新造し、外に百五十噸及び四十噸の二隻がある。ぬし丸はモロツカス諸島のアンボイナ市に廻航して貿易を開拓し、成績を擧げて居る。

斯くの如く吾人はニューギニアに對し既に相當の研究と經驗とを持つに至つたのであるが、之は總て前々から吾人の抱いて居たニューギニアに對する希望を裏書きするものであつたのである。以下順次曩に掲げて置いた諸條件に照してニューギニアが如何に我國民の大量移住地として適するものであるかを説明するであらう。

(一)面積が宏濶で人口が稀薄なこと。

ニューギニアは、一名バブアとも呼び、グリーンランドに次ぐ世界

第二の大島であつて、面積約八十萬方籽と稱せられ、蘭領、英領及び濠洲委任統治地の三部に分れて居るけれども、其のうち西半部を占むる蘭領のみにても面積四十萬方籽に達し、本州、北海道、九州、四國を併せたる我内地の總面積三十八萬方籽よりは餘程廣い。

人口に就いてはニューギニアは今尙ほ石器時代に在り、内部の状態の如き殆んど不明なる地方のみ多いのであるから正確なことは判らないけれども、一九二〇年に於ける和蘭政府の調査に依れば蘭領ニューギニアの人口はバブア族を主とし、少許の支那人其の他の東洋人及び蘭人官吏を併せ十九萬五千餘人となつて居るから、一方籽當り纔に〇・五人に相當しサワラ沙漠を包含するアフリカ大陸に比するも尙ほ十の分に過ぎないのである。故に之を事實上の無

人郷と稱するも殆んど不可はないのである。

今ニューギニアの植民的價値を示すために、滿洲國及びブラジルと對比し、蘭領ニューギニア(ニューギニア全島の半分)の面積、人口密度を比較し、尙ほ之に併せて熱帶圈内に於て最高度の開發を遂げた爪哇との比較を試みれば左の通りである。

國名	面積	人口	密度(一方籽當り)	調査年次
日本内地	三八二、二六五	六五、三六六、五〇〇	一七一・〇	一九三一
爪哇	一三一、六一〇	四一、五六〇、〇〇〇	三二五・〇	一九三〇
蘭領ニューギニア	四〇〇、〇〇〇	一九五、〇〇〇	〇・五	一九二〇
滿洲國	一、一九二、三八八	三三、六九六、九二〇	二八・〇	一九三〇
ブラジル	八、五二四、七七八	四〇、二七三、〇〇〇	五・〇	一九三〇

蘭領ニューギニアは面積に於ては滿洲國、ブラジルに劣るけれども其の日本内地よりも廣い沃野は殆んど全くの無人である。而も熱帯の土地は爪哇の例に見るが如く極めて生産力に富み、單位面積當りの人口收容力が著しく高い。蘭領ニューギニアが現在の爪哇程度の開發を遂げれば一億二千萬の人口を養ひ得るのである。更にニューギニア全島を以てすれば實に二億四千萬の收容力があるからニューギニアを獲得すれば我國の人口問題は何等の不安も感じなくなるのである。

(二) 氣候風土が日本人の居住に適すること、只耐へ得るばかりでなく、適することが必要である。

移植民問題に於いて氣候の大切なことは云ふ迄もない事であつて移住地が只移住者の生活に耐へるだけの氣候では駄目であつて、充分なる健康を維持し思ひ切つた活動の出来る即ち氣候の心配なしに働ける處でなければならぬのである。

然るにニューギニアは赤道直下であるから定めし酷熱であらうと云ふことは何人の想像にも浮ぶ處であらうが、事實はニューギニアは實に氣候の良い處である。由來地球上最も暑いのは南北緯各十度乃至二十度の土地で、赤道直下十度以内の土地は却つて之よりは涼しいものである。之は太陽に對する地軸の傾斜の關係から來るものと思はれるのであつて、蘭領ニューギニアは南緯零度二十分から九度十分の間に位し、却つて酷熱を免れて居るのである。ニュー

1ギニアの氣候に關しては當社も事業開始以來調査を繼續して居る處であるけれども茲には特に和蘭陸軍探險隊の調査したものを舉ぐれば、其の各地に於ける氣温は左の如きものであつて、其の驚くべき緩和なるに何人も驚歎を禁じ得ない處と思ふのである。

地 方	最 暖 月	最 涼 月
マラウケ	二七—二八度	二四度
エイランデン地方	二七	二四
ムーレンツ河畔	二六	二三
ブルーメン河畔	二七	二四
マノクワリ	二七	二六

現在當社の事業地たる南洋群島のサイバン、テナアン、ロタ等の諸

島は北緯十八度より二十度の間に位し、實は此の邊が最も暑い地帯に當るのであるが、島が小さく海風に惠まれて居るので非常に凌ぎ良く、二萬五千餘の移民は當社の事業が集めたばかりでなく、氣候の良いことも大いに手傳つたのであるが、それでも朝夕寒いと思つたことは無く、又良い種類の薔薇は生育しない。菊、ダリヤは甘く咲き得ない。鳳仙花、雞頭の生育は甚だ貧弱である。

然るにニューギニアに渡つて見ると實に涼しい。夜などは寧ろ寒い。さうして良種の薔薇の花が良く咲き、菊やダリヤは幾種も大きな花を付け、鳳仙花や雞頭も非常に良く咲き誇つて、それに鳥が多く、朗かな鳥の聲が充滿し、ニューギニアは實に明るい處である。之はニューギニアに關する從來の間違つた觀念を根本的に打破した

ければならない處であつて、ニューギニアは前にも言ふ通り文化の潮流から數萬年も取り遣され、世界に全く紹介せられることなしに現代に至つて居る不可思議な國であるので、誤解は誤解を産んで獐猛な食人種が住み、猛獸毒蛇が充滿し、マラリヤ其他惡疫の本據で氣候の如きも酷熱を極め、全く暗黒ニューギニアとして近寄ることも出来ない恐ろしい島に考へられて來たのであるが、之は全くの誣罔であつて、ニューギニアの地勢は南部海岸に沿うてカルステンツ其他五千米の高峯が連亘し四時白雪を戴き、それが直ちに斷崖を爲して南海岸に逼つて居るので此の高山より流れ下る雨水は海岸一帯に溢れて泥濕地となり、加ふるに高温のためマラリヤ其他惡疫も猖獗であつて事實近寄り難い様であるが、此の大山脈の北は緩かな

る傾斜を爲し、其の海に至る迄千里の沃野を連れ、其の高原地帯の如きは春の薰、夏の百合より秋のコスモスに至る迄一時に咲き亂れ、四時春の如き武陵桃源郷である。其の氣候に恵まれたることは恐らく北米のカリフォルニアを凌駕し、氣溫の變化劇しく多濕なる日本内地の如き到底及び得ないのである。

此の北ニューギニアは海岸地方の平地に於ても午後の四時頃になると其の涼しくなることは又驚くべきもので、丁度東京の初秋の夕方を想はせるのであるが、更に夜になると寒さを覺える程度になり、ヴェランダで話をして居ると寒くなるので奥の部屋に引込んで話を續ける様な状態になる。従つて晝間の疲勞が夜の涼しさで完全に回復することになり、蚊なども至つて少く、サイパンから轉勤に

なつた當社の社員などは、總てが暗黒ニューギニアの想像とは餘りに懸け隔つて居るので悉く驚喜して居るのである。

私の行つた時も餘りに氣候が良過ぎるので偶然最も良い季節に遭遇したのではあるまいかと思ひ、和蘭の官吏其の他土人などに尋ねて見たのであつたが年中大體此の通りで變りは無いと云ふことで、其の涼しさは如何にも大地から湧き出る涼しさに感じられた。マノクワリに於ては山の清水を其の儘水道に使つて居るが、非常に冷い綺麗な水で、其儘飲料に供して少しも差支がない。之は熱帶に於ては珍しいことである。

更にマノクワリを出發して各地を調査した時は旅館が無いので大概船の中に寝たが、涼風掬すべきものがあつて甚だ快適であつた。

密林の中を調査中に雨が降り出し、氣温が降下して厚い着物の無いのに閉口したこともあつた。兎に角非常に氣候が快適であつて、三十度を超す様な暑さは殆んど無く、日本人の健康に理想的であることは絶対斷言し得る處であると思ふ。尙ほニューギニアは蘭領印度内に於ても最も氣候の良い處であることは、インド・ユーロピアン拓殖協會の顧問として、ニューギニアに一箇年滞在したことのあるロザール・メツツエ氏が昨年十月のジャバン・タイムスにニューギニアの氣候を左の如く述べて居るのでも明かである。

蘭領北ニューギニアの拓殖上極めて重要なる要素は其の氣候の頗る佳良なることであつて、それは啻に健康に適するのみならず、蘭領東印度の他の諸地方に比し甚だ清涼なものである。

(三)日本から距離の近いこと。

曩にも述べたるが如く、日本の過剰人口は既に數千萬に達し、斯る大量の移民を海外に送るに就いて、又其の移住地が母國の延長として總てに密接なる連絡を圖り、日本精神を維持し、統一的經濟活動を營み得る上に於いて、日本から近いと云ふことは又絶対不可缺の大切なる條件でなければならぬ。然るにニューギニアは横濱から直南二千哩であつて、速力十節程度の古船を以てしても十日足らずで行くことが出来、將來直線航路を設けて優良船を使ふことにすれば、五六日で達することが出来るのである。斯くの如くニューギニアは實に近いのであつて、新嘉坡に對しては三の分二、ブラジルに對し

ては纔に其の六分の一に過ぎない。

ニューギニア 二、〇〇〇哩

新嘉坡 三、五〇〇

ブラジル 一、二、八〇〇

さうして更に都合の良いことは、ニューギニアは赤道を挾んで委任統治の南洋群島に隣接し、ニューギニアに達するには日本の内海航路も同様、日本の統治下に屬する海のみを通つて行くことが出来るのであつて、南洋群島を連絡の楔子として南北に呼應せば眞に太平洋を日本の内海と爲すことが出来るのである。現在でも南洋廳の在るパラオから北ニューギニアの首都マノクワリ迄は二日足らずで社船を以て連絡して居るのである。

(四)地味が日本よりも肥沃で無肥料を以て希望作物が出来ること。之も極めて大切な問題であつて、開拓後数年十数年の間は無肥料を以てどしどし希望作物が出来る様でなくては農業植民地としての價値が無い。初めから肥料を使つたり、非常な勞力が必要な様では、移民は折角日本を離れて來た甲斐が無いと考へるであらうし、植民の經濟が成り立たず大量の移民を入れる如きことは到底出來難いことである。南洋群島が短日月の間に急速な發展を遂げ得た一つの原因として南洋群島は極めて地味豊沃で開拓後十數年間無肥料を以て栽培を続け更に地方の減退を示さざる點に負ふことも尠くないのである。

ニューギニアの地味に就いては當社に於て既に各地に亘り廣く調査を遂げ栽培も行つて居るのであるが、其の測るべからざる豊沃なる地味には誠に驚嘆を禁じ得ないのであつて、開拓の曉は恐らく農業の寶庫として世界無比の地位を占むるものであらうと思ふのである。私も自らゲールフィンク灣の沿岸を周航し、マンベラモの大河を初め數個の河川を溯航して見たのであるが、到る處萬古未到大の大密林は全く物凄いものであつて、單に林業の立場だけから見ても垂涎に堪へないものであつた。當社のモミに於ける棉花栽培の成績に依れば、植付後三四箇月で樹高一丈に達する。之を北米のミシシッピ沿岸に於ける棉花の中心地に於てすら地力減退に依り樹高漸く三四尺より伸び得ざると云ふに比して到底同一日の談て

はないのである。其の他米は年に二回、甘藷は三四回の收穫があり椰子、タピオカ、珈琲、カ、オの如きは最も適作物で、又豊富なる澱粉を含有し土人の主食物たるサゴ椰子は到る處に密生して居る。マンベラモ河の流域の如きは斯る豊沃無比の大平原を數百萬町歩聯ねて居るのであるから只々驚くの外はないのである。尙ほニューギニアの土壤に關しては前記のロザール・メッツエ氏は亦

ニューギニアは土壤深く腐蝕土に富み、殆んど一切の熱帶亞熱帶作物に適する土地を具へ、完全なる處女地であつて、密林を以て蔽はれ、鐵木其の他の有用材に富み、建築其の他に用ふることが出来る。

と述べて居るが之はニューギニアの真相である。

(五)日本と貿易關係を有する農作物、工産物、礦物等が出來、此等のものが日本の輸入品で、それを移民及び我が經營者の手により日本に入れ、統一的な經濟活動を營み得ること。

我國の國際貸借に於て輸入の大宗を占めるのは棉花、羊毛、鐵及び鑛油である。故に此の四つを我國の勢力圈内から生産して輸入を防遏することが出来る様になれば我國の經濟は非常に樂になる。

棉花及び鐵類の近年に於ける輸入額

種目	昭和六年	昭和七年	昭和八年
實綿及繰綿	二九六、二七三	四四七、四〇一	六〇四、八四七
羊 毛	八六、一四六	八七、五五九	一六四、一九二

千圓

千圓

千圓

鐵礦及鐵類	五七、四五一	七八、七一一	一五二、一五三
鑛			
油	八五、七八八	九八、五八八	一〇八、八五九
計	五二五、六五八	七一二、二五九	一、〇三〇、〇五一

即ち此の四つを以て五億乃至十億以上の輸入を行ふのであるから此の四つが我國の經濟を壓迫して居ることは大きなもので、且つ斯る重要な物資を大部分外國の供給に仰いで居ることは我國の將來にとつて非常に重大な問題である。然るにニューギニアは恰も此等の方面に其の最大の長所を發揮し得るのであるから、大量の移民を此處に送ることは實に過剩人口の捌け口としてのみでなく、我本國と一體の經濟的活動を營んで、之から先きの複雑多難極まる實際生存競争に處して能く日本を磐石の安きに置くものと謂はなけ

ればならぬ。さうして之は亦同時に植民經濟の樹立を極めて容易にする便宜あること言ふ迄もない。

ニューギニアの棉花に就いては既に述べた通りで、棉花はニューギニアに於ては野生植物であつて、其の豊沃無比なる曠野は世界有数の棉花國に爲し得るもので、實に我國の棉花輸入を防遏し得るのみならず、將來に於ける世界の棉花需要を満し得るものは此のニューギニアであらうと思はれるのである。又ニューギニアの高原は曩にも述べたる通り四時常春の世界無比氣候の良い處であるから、其の利用價值は亦莫大であつて、之を羊の大牧場と爲さば濠洲其他を凌駕する羊毛國と爲し得ることは容易である。其の第一の候補地としては、モミの奥地アンギ湖の周圍一帯に連る大高原の如き

は實に絶好なものであらうと思ふのである。

鐵、石油、其の他の鑛物に就いてはニューギニアは未だ嘗てボーリングをしたことの無い土地であるから地下の寶庫は如何なる状態になつて居るものであるか確言出来ない處であるけれども、由來ニューギニアは非常に鑛脈の豊富なることが想像されて居る處であつて、二三判明して居る分だけでも大變なものである。其の他ニューギニアに關する文獻には皆鑛物の有望なることが書いてあるのが多く、和蘭の官吏も頻りにニューギニアに鑛物の多いことを想像して居るのである。日本の大きな鑛業會社中にも相當考へて居るのがあるのであるが、何分にも瘴癘蠻雨の不健康地であると云ふ傳説に脅かされて悉く躊躇して居るのは遺憾なことである。

石油に就いてはマンベラモ河の東を流るゝ大河ピリ河の上流テール河は石油臭を帶ぶるが故に此の名を冠せられたもので更に其の上流テールベタイン河は其の儘石油河の名稱を帶ぶるのであつて、其の原湧地は夙に一九二〇年和蘭探險隊に依り確認せられた處であり、更に昭和八年に於ける當社の鑛物調査に依つて此の油田は東西の延長約百軒に及ぶ廣大なものであることを略々明かにしたのである。又ピリ河の沿岸には大炭田の存在することも略々確實である。又北ニューギニアの河川から多く砂金が出ることは既に有名なこととして私は其の見本を澤山集めて居る。英領ニューギニアのラム河上流の砂金業は數年來旺盛なる産金量を以て世界の視聽を集めつゝある處であるが、之と地續きの蘭領に於ても豊富な

る金鑛の存在することは別に不思議のないことであつて、此の外英領に於ては石油、石炭、鐵、銅等が既に少し宛採掘を開始されて居るのであるから此等は何れも蘭領にも存在するものと見られるのである。兎に角東印度一帶は非常に鑛物の豊富な處で石原産業が馬來半島に於て優秀な鐵を掘り、年額六十萬噸も製鐵所に供給して居る如きは、國家に裨益する處實に偉大なものである。其の他爪哇、ボルネオ、スマトラは石油の寶庫であり、ニューギニアも必ず石油を初め豊富な鑛物を以て將來の日本を利益するであらうと思ふのである。

(六)先住民族に對して勞力其他の問題を起さず之を日本化し得ること。

南洋でも爪哇の様に廉くてよく働く人間の多い處では少し不況になると仕事が無くなり政府で出稼を奨勵して居る様な處もあるが、ニューギニアは前述の通り内地よりも廣い西半部の蘭領に人口が二十萬に満たない有様であるから、先住民族と勞力問題で衝突する様なことは考へられない。現に當社のニューギニア事業に於て五百名の土人勞力を常時雇傭して置くことは相當に困難である。

現在當社の事業地たるサイパン、テナン、ロタの如き諸島は移民の數が土人の數の十倍程度になつて居るから、全く日本内地と同様であつて、他の民族に對する氣がねは全くない。恐らく日本が有する何處の植民地よりも最も住みよい所であつて、従つて移民も定着して全く日本化することが出来るのである。此の點は非常に大切

なことであつて、日本の大なる強味は約一億に近い大和民族が異分子を混へず、渾然たる一體を爲して舉國一致の力を發揮する點に在るのであつて、之を他の多くの國家に於ては多數の民族の寄り合ひ世帯で、此のために内紛軋轢の絶える時がなく、常に國力が分散して團結の力を發揮し得ないのに比すれば、此の強味は飽く迄も維持し擴大強化しなければならぬのであるが、多數の先住民族の居る處に少數の日本人を出して遣るのでは、之は出來ないことである。

北米合衆國又はブラジルの如く純然たる他國に於ける日本人移民は結局第二代第三代と經つて次第に日本人の特性の失はれて行くことは己むを得ない處であらうし、又滿洲國は素より朝鮮、臺灣の如き日本の範圍又は極めて特殊なる關係に在る土地に於て

すら、此等の地方には悉く多數の先住民族が居つて其の間に少許の内地人を送るのであるために、多くの困難なる問題を惹起することは吾人の常に苦慮しつゝある處である。

然るにニューギニアは全くの無人郷であるから、之に對する植民は全然異民族を混へざる日本の内地其の儘を太平洋の南に再現することが出来るのであつて、大和魂も充分に維持することが出来る。之は大和民族の擴大が行はれるのである。之はニューギニア植民の絶大なる強味であると謂はなければならぬ。

(七)日本政府の威權が相當行はれる土地であること。

米領英領等に於ては初めに述べた國際的偏見のために日本の移

住者は非常なる壓迫を受けて居るのであるが、從來の和蘭政府は寧ろ奇異に感ずる程度に迄公平且つ好意を示し、日本人に對する總ての取扱を本國人たる和蘭人と少しも區別しないのであつて、總ての統計に於ては日本人を歐洲人中に算入する有様であつたのである。之は武力を持たない和蘭が、あれ程の大植民地を維持する上に於て是非日本を憚らなければならぬ立場がさうさせたものでもあらうか、寧ろ敬遠と見る方が當つて居たのであらうが、兎に角當社の事業に就いてもニューギニアの官憲の如きは素よりバタビア、スラバヤ等の爪哇中央政府に至る迄、悉く假令表面だけでもせよ、非常なる好意を示し、事業遂行上便宜が多かつたのである。

然しながら最近の經濟的崩壞以後は和蘭の政策は一變したので

あつて、之は後に詳しく述べることとし、何れにしてもニューギニアを買收せんとする吾人の計畫よりすればニューギニアを自國の一部として植民するものであるから、此の點に就ては安全此の上ないのである。

蘭領ニューギニア買収の可能性

以上論ずる處に依つて我國の人口問題は姑息なる手段を以ては到底解決の附かざる性質のものであり、而も之が對策として我國にとり植民能率の高からざる滿洲國及びブラジルにのみ期待を繋ぐことは危懼に堪へないことであつて、速に國家的の一大決意を固め植民能率に優れたる土地を獲得して置くことの甚だ緊要事たることを明かにし、且つ斯る目的に合致し日本の大量移民を送つて好成績を擧げ得る土地はニューギニアを措いて他に絶對求むべからざ

ることを明かにした。

然しながらニューギニアは純然たる他國の領土であつて、之に向つて多數の移民を送ることに就いては滿洲國又は是迄のブラジルの如く國家の了解のある處ではない。又從來和蘭の國法に従へば一定の入國税を拂ふものは自由に入國し得たのであるけれども、それすらも一九三三年に於ける入國令の改正以來は蘭領印度に於ける外國人の入國者數は一箇年一萬二千人に限定され、日本人の一箇年に入り得る數は八百人に限定されて終つたのであるから、蘭領印度は最近の物的鎖國の外に人的にも固く日本の發展に對して門戸を鎖して終つたのである。

由來和蘭は我國にとつては三百年の昔に於て鎖國太平の眠り安

らかなる門戸を叩いて初めて西洋文明の光を注入して呉れた國であつて、又我國が明治維新の大業を成就して國運の躍進を遂げたる後に於ては、和蘭は其の東印度に對する安全保障の立場よりしても努めて兩國の和親を維持すべく平和修好の態度に終始したのであつたが、近年に於ける蘭印經濟崩壞の危機に直面して全く冷靜を失ひ、英國と結びて相續く排日政策に狂奔しつゝ、あるは遺憾に堪へない處である。

蘭領印度に於ける險惡なる空氣は既に一九三二年私が東印度を歴遊したる際に於て深く感じた處であつて、蘭領印度の日本に對する關係は當時實に微妙なる轉機に在つたのである。即ち一方に於ては日本の商品商人が非常なる發展を遂げつゝ、あつたのである

が、他方に於ては爪哇政府並に在留蘭人の日本に對する警戒は甚だ憂慮すべき事態を辿りつゝあつたのであつて、蘭領印度に於ては夙に何等の統制なき二百萬人の支那人は問題なきも日本人が二萬に達せば警戒すべきものたることを説かれて居たのであるが、更に恰も當時勃發したる滿洲事變上海事變の蘭領印度土着民に與へたる影響は極めて重大であつて、土民は印度に於ける獨立運動の影響及び兩事變より國際聯盟脫退に至る日本の強硬なる態度により漠然日本の援助の下に獨立運動を起さんとするが如き妄想に捉はれたるものゝ如く、此のために蘭印政府並に在留蘭人は非常なる衝動を受け、當社が買収したるニューギニアに於ける權利に就いても爪哇の議會は再三質問者を出し、日本人に斯る大なる權利を與へたるこ

とに就いて甚だ政府は非難されたのである。又私が蘭領印度の各地を廻りニューギニアの副知事よりタルナテの知事、アンボイナの副總督を経爪哇に出て、總督、總務長官、内務長官、商工農務長官、海軍長官及び參謀長等爪哇政府の首腦を歴訪したる際に得たる印象に就いて見るも、日本人の發展に對する爪哇政府の態度は實に重大なる轉機に在ることを憂慮せしむるものゝみであつたのである。

然るに此の觀測は意外にも早く事實となつて現れ、日本商品、日本商人、日本移民に對する排斥が公然表明せらるゝに至つたのであるから、吾人のニューギニア植民計畫も速に根本的解決を必要とするに至つたものと信ずるのである。ニューギニア植民の根本的解決とは何ぞや。予の見る處に於ては之は一大英斷を以て蘭領ニュー

ギニアの買収を敢行し、一は以て我國の人口問題に根本的解決を與ふると共に、一は之に依つて却つて和蘭政府の絶えざる不安を拂拭して世界の南洋問題に最後の安定を與ふることの外には絶対に無いと深く信ずるのである。

茲に提案したるニューギニア買収案は一見無稽なるが如くして、其の眞意義を意味するならば、我國にとりては人口問題を解決して、後來の國民のため眞に昭和維新の實を擧ぐるものであり、和蘭にとりては來るべき世界經濟の爭戰場たるべき東印度を列強の貪慾より防禦するものであつて、兩國の和親發展のためのみならず世界平和のため劃期的重大なる提案たることは、我國に於ても和蘭に於ても公明なる輿論の支持を得らるべき處と信ずるのである。尙ほ

和蘭は東印度經營の不進捗及び最近に於ける東印度の經濟的崩壞並に東印度獲得の歴史的事情に於てニューギニアの賣却を困難とせず、寧ろ甚だ歓迎すべき事情に在ることは吾人の提案に極めて有望なる實現性を與ふるものである。

第一に和蘭の東印度植民地は百九十萬方秆即ち本國に六十倍する廣大なるものであるに拘らず、曩に述べたる通り本國に於てはヅイデルゼーの埋立などを行つて居るのであつて、東印度のうち開拓を行つたのは僅に十三萬方秆の爪哇及びスマトラの少部に過ぎず、爾餘のスマトラの大部、ボルネオ、セレベス、ハルマヘラ、セラム、モロツカス、ニューギニア等を併せ約百八十萬方秆に達する尨大なる土地は未だ殆んど全く原始の儘に放擲されて居るのである。

蘭領東印度に於ける開拓地と未開地との比較 (一九三〇)

	面積	人口	密度(一方軒に付)
蘭領東印度全體	一、九〇〇、〇〇〇 ^{方軒}	六〇、七三一、〇〇〇 ^人	三二
内 開拓地(爪哇)	一三〇、〇〇〇	四一、五六〇、〇〇〇	三一九
未拓地(爪哇以外)	一、七六九、〇〇〇	一九、一七一、〇〇〇	一〇・八

即ち和蘭の東印度經營は未だ漸く緒に就いたばかりであつて、之よりスマトラの經營を完成するに少くも百年を要すべく、更にボルネオ、セレベス、ハルマヘラ、セラム、モロツカスと開拓を進めニューギニア迄經營の手を伸ばし得るのは今後果して何百年の先であるか、又果して和蘭のみの手を以て斯くの如き大開拓を進め得るのであるか、殆んど豫測を困難とするのである。即ち和蘭の東印度經營に

於てはニューギニアの如きは全く問題とされないのであつて、されば和蘭官吏の如きはニューギニアに對しては何等正しき認識を持たず、爪哇方面よりニューギニアの南岸に多少の船便あるため南部ニューギニアのスワンブ地帯に就いて多少の知識を有し之を以てニューギニアの全般を推測して、ニューギニアは開拓不可能なる土地と思ひ込んで居るのである。即ち地理的關係に於て我國に最も重要なるニューギニアが、同じく地理的關係により和蘭にとりては全く必要な最奥地となつて居るのであつて、之は我國にとつて非常なる仕合せと言はなければならぬ處である。

第二に蘭領東印度は最近數箇年の間に於て世界的不況及び世界的關稅戰爭の最も深刻なる打撃を受け、爪哇政府は容易ならざる財

政難に陥り、財政匡救のためには何か非常なる對策を必要とするのではないかと見らるゝに至つたことである。

從來蘭領東印度は和蘭の寶庫を爲し、和蘭は一に東印度より上り來る處の收入を以て其の財政を維持して居たと云ふも不可ないものであるが、一九一二年以來の公債發行に依る東印度の積極的開發策が禍因となり、一九二六年に至つて東印度官吏の大増員を開始したる處恰も世界的不況に遭遇し、蘭領印度は其の打撃を受くること最も深刻を極め殆んど經濟的基礎を破壊さるゝに至つたのである。

(一) 蘭領印度產業の没落

世界恐慌を轉機として蘭領印度產業の全般的没落は先づ蘭印產業の中樞を爲したる爪哇糖業の没落に始まる。從來印度は年額百萬噸以上の爪

哇糖を購入して其の最大の顧客であつたのであるが、曩に高率關稅を設定して自産自給を計りたる結果一九三三年に於ては爪哇糖の購入は三十萬噸に減少し、近き將來に於てはそれすらも皆無となる形勢となり、日本糖業は既に一九二九年に於て自産自給を實現して少許の輸出糖原料以外には全く爪哇糖の購入を必要とせざることとなり、支那も亦農産物の下落、内亂及び關稅引上等に依つて爪哇糖の購買を減じ、歐洲は大戰以後急速に甜菜糖業を復興して夙に爪哇糖を驅逐せる等各地の市場より悉く閉出せられ、爪哇糖業は一九三〇年迄を黄金時代として急轉直下の凋落を遂げ、年額三百萬噸の産糖高は五分の一以下に降り、百六十餘を算したる工場のうち操業を繼續するものは四分の一に減じ、而も尙ほ國內滯貨二百五十萬噸を擁しつゝある有様であつて、之を崩落せる糖價三盾五十仙を以て換算するも一億五千萬盾の滯貨となり、爪哇銀行の紙幣流通總額一億八千萬盾に殆んど匹敵するのである。嘗て年額四億盾の輸出を行ひたる爪哇糖としては

殆んど想像も困難なる凋落振りと謂ななければならぬのである。
 此の糖業の没落に依り爪哇銀行の投下せる八億盾の資本の内六億盾は
 全然死滅に歸し此のために銀行は純然たる破産状態に在るのであつて、這
 般の事情が爪哇の民衆に理解され一朝取付等に逢ふときは全く收拾すべ
 からざる混乱に陥り東印度の破綻となることは最も注目すべき處である。

○爪哇糖の生産輸出及び持越高 (單位メートル噸)

年 度	生 産 高 噸	輸 出 高 噸	期 末 持 越 高 噸
一九二八—二九年	二、九八六、〇九八	二、六六三、八三五	九、八三三
一九二九—三〇年	二、九四二、〇八二	二、四三二、六九八	一四七、八九三
一九三〇—三一年	二、九六九、二六九	二、〇九九、八七六	六一〇、〇二七
一九三一—三二年	二、八四二、六四二	二、五七二、九二九	一、五三三、五三五
一九三二—三三年	二、六一一、三七六	一、三三一、四七二	二、三〇七、六三九

一九三三—三四年	一、四〇一、三二七	一、二〇八、〇〇〇	二、二五〇、九六六
一九三四—三五年(豫想)	六〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	一、四〇〇、九六六
一九三五—三六年(豫想)	五〇〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇	四五〇、九六六

○爪哇糖の生産縮少状況

年 度	採 業 工 場 數	植 付 面 積 ヘクタール	産 糖 高 噸
一九三二年	一六五	一六五、五六二	二、六一〇、〇〇〇
一九三三年	九七	八四、九八〇	一、四〇一、〇〇〇
一九三四年	四五	三五、七九〇	六〇〇、〇〇〇

其他砂糖と並んで蘭領印度の重要産業たる石油に於ても、一九三三年を
 一九三〇年に比較すれば輸出の數量に於ては些少の増加を見たるに拘ら
 ず金額に於ては略々半減するに至り、此の外護謨茶、珈琲、コブラ等蘭領印度
 の主要産業は悉く販路の梗塞金本位制維持に依る打撃等のために凋落を

極めざるものなく、蘭領印度の産業は全面的没落を遂げて終つたのである。

(二) 經濟の頽勢

從來蘭領印度の經濟を維持したるものは十年間に五十億盾の出超を行ひたる旺盛なる輸出貿易であつたのであるが、最近の五箇年間に於て輸出は十五億盾より四億六千萬盾に、輸入は十億盾より三億一千万盾に、即ち輸出共三分の一に顛落し、就中平均年額五億盾に達したる出超は僅に一億五千萬盾に激減し、爪哇のみに於ては些少ながら入超に轉じたる状態であつて、他に重要な國際貸借上の受取勘定を持たざる蘭領印度は其の經濟を支持し得ざる危険に直面し、商工業の破産、農園工場の閉鎖續出し、失業者は激増を告げ、金融は全く梗塞の状態となり、物價竝に諸株式は慘落し、經濟の困窮其の極に達するに至つた。

○ 蘭領印度貿易の頽勢

年	次	輸 入	輸 出	出 超
一九二八年		九四八、三五九 <small>千盾</small>	一、五七六、五八〇 <small>千盾</small>	六二八、二二一 <small>千盾</small> (一〇〇)
一九二九年		一、〇五二、三二六	一、四四三、二〇八	三九〇、八八二(六二)
一九三〇年		八三〇、四一五	一、一五六、七四七	三二六、三三二(五二)
一九三一年		五四五、〇六七	七四六、七五五	二〇一、六八八(三二)
一九三二年		三六八、七五八	五四一、三七五	一七二、六一七(二七)
一九三三年		三一七、九四八	四六八、二三六	一五〇、二八八(二四)

○ 爪哇銀行紙幣流通高及手形交換高及び投資高の減少

年	度	紙幣流通高(括弧内指數)	手形交換高(括弧内指數)	投資高(括弧内指數)
一九二八年		三六、二八三(一〇〇)	三、八一、四三四(一〇〇)	八五、二六三(一〇〇)
一九二九年		三〇、八〇四(九七)	三、六七、七八〇(一〇〇)	一〇三、四九三(一一〇)
一九三〇年		二八、〇四四(八六)	二、七七、四七三(七六)	五五、四三五(六五)

一九三一年	二五二、四七六(七七)	二、三七四、三〇五(六六)	五四、〇三〇(六三)
一九三二年	三三四、四三八(七〇)	一、七六〇、四二一(四九)	四五、〇八三(五三)
一九三三年	一八七、五三八(五九)	* 一、一五〇、〇〇〇(三七)	三八、七五六(四五)

* 概数 尙ほ紙幣流通高は一九三三年のみ十二月末現在他は三月末現在

○物價の慘落 (指數)

年次	卸賣物價		小賣物價	
	輸入品	國內品	輸入品	國內品
一九一三年(戰前)	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九二八年	一五五	一二五		
一九二九年	一五五	一二三		
一九三〇年	一四六	八八		
一九三一年	一一六	六六	一一九	一〇七
一九三二年	九四	五二		

一九三三年	七五	四〇	九九	九〇
-------	----	----	----	----

○諸株式の慘落 (指數)

年次	大	護謨製糖	茶	煙草	拓殖銀行	銀行	商會社	鐵道	船舶	總平均
一九二八年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九二九年	九二	八五	九一	八七	九〇	九六	一〇三	一〇〇	九九	九三
一九三〇年	四六	六三	七〇	六五	六八	八七	八一	七七	七四	七〇
一九三一年	三三	三六	四五	五〇	四一	六四	六〇	五三	五二	四七
一九三二年	三三	一九	二九	三五	三三	三九	四五	三六	三三	二八
一九三三年	三五	一五	三七	三三	一八	三〇	五一	一五	二五	二六

(三) 財政の危機

斯くの如き深刻なる經濟界の凋落は必然的に蘭領印度財政の基礎を破壊せずには措かないのであつて、爪哇政府は一九二八年以來全く歳入と歳

出との均衡を欠ひ、一箇年五六億盾の比較的小規模なる財政に於て連年一億數千萬盾に達する夥しき赤字を出すに至り、政府は非常なる緊縮政策を採つて財政の建直しに努力しつゝあるのであるが、効果が少く、赤字公債は最近五箇年間に五億盾の激増を遂ぐるに至つたのである。

○歳入歳出の均衡を失ひたる蘭印政府の財政

年 度	歳 入	歳 出	歳入不足
一九二八年	八三五、九一七 <small>千盾</small>	八四五、七六五 <small>千盾</small>	(一) 九、八四八 <small>千盾</small>
一九二九年	八四八、五二九	九〇四、五九三	(一) 五六、〇六四
一九三〇年	七五五、六一六	八九〇、五六八	(一) 一三四、九五二
一九三一年	六五〇、四一七	七六六、三四七	(一) 一一五、九三〇
一九三二年	四九九、三八七	六二九、〇〇七	(一) 一二九、六二〇
一九三三年	五四〇、八二六	六四二、〇一八	(一) 一〇一、一九二
一九三四年 (協賛豫算) (見積豫算)	四八五、九二一	八〇三、九一六	(一) 三一七、九九五

○蘭印政府國債の激増

年 度	一時借入金	固定國債	合 計	利子及消却高
一九二八年	* 六、九三六 <small>千盾</small>	一、〇一〇、六九八 <small>千盾</small>	一、〇三三、七六三 <small>千盾</small>	九四、五六六 <small>千盾</small>
一九二九年	四三、九〇六	九八〇、三二一	一、〇三三、一七七	八六、三三三
一九三〇年	一〇一、一六七	一、六三三、九六四	一、七三五、一三一	九五、六〇九
一九三一年	一八六、七三九	一、一四〇、三四一	一、三二六、九八〇	八一、五三六
一九三二年	二四〇、八二〇	一、一八八、〇六四	一、四二八、八八四	九七、七九一
一九三三年	二五〇、〇〇〇	一、二六一、三五六	一、五一一、三五六	一〇六、九〇三

蘭領印度の産業、財政、經濟が僅々數箇年の間に急轉直下の崩壊を遂げ、和蘭は財政的に東印度統治を放棄するの己むなきに至り、漸次

實權を英國に委譲しつゝあるにあらざると見らるゝ迄の窮地に立つに至つた原因としては、世界的不況に依る輸出産業の打撃、各國の採れる關稅障壁のための輸出梗塞、金本位制維持に依る金融の休止、並に輸出貿易の不利等數へらるゝものは多々ありと雖も、其の根本的原因に溯るに於ては、數百年に亘つて和蘭が東印度の上に加へ來つた極端なる搾取的植民政策が因果應報の理を辿つて茲に當然來るべき破綻を曝露したるものと見なければならぬのである。

和蘭の東印度統治は古今未曾有の惡會社と迄稱せられたる東印度會社の暴政に胚胎し、其の植民政策は終始搾取に徹底し、其の意味に於て世界の驚異とせらるゝ迄の成功を收めたものであつて、其の驚くべき事實を舉示すれば左の通りである。

一、從來蘭領印度が和蘭の寶庫と稱せられ、數百年に亘り旺盛なる出超を維持し得たる所以のものは、天然資源の惠澤に依る處も大であるが、主として和蘭が蘭印土民の生活を壓迫して之を事實上の奴隸制度の下に緊縛し、世界無比の低賃銀の下に酷使したる結果と見るべきである。

二、蘭領印度の財政が獨立したる一九一二年より其の崩壞に至る二十年間の出超約百億盾、即ち年額五億盾に達したる出超の大部分は、蘭人官吏並に退職者の俸給、恩給、費、其他王國汽船會社に對する補助等、悉く和蘭本國並に和蘭人の搾取に充てられたるものである。

三、官吏の俸給並に恩給費は實に蘭領印度財政の三分の二を占

め、蘭領印度に於ては官吏は地方の小區域の郡守の如きに至る迄、又民間に於ては沿岸航路の小汽船の船長の如きに至る迄、悉く年俸一萬盾以上我國に於ては大臣給の高給を與へられ、退職後は略本給に等しき恩給を與へらるゝのであるから、和蘭人は本國の中等學校を卒へ、蘭領印度に十年乃至二十年も勤務すれば本國に歸つて終生贅澤なる生活を營むことが出来るのである。

四、極言すれば和蘭人は蘭領印度に於て貯蓄したる貯金の利子と蘭印政府よりの恩給に依つて生計を維持するものであるから、貨幣價值の下落は其の耐ふる處でなく、蘭領印度の産業が崩壊に瀕すと雖も、金本位離脱又は平價切下の如き必要なる手段を回避し、蘭領印度を今日の窮狀に陥れたのである。

五、蘭人官吏の東印度統治は住民の福利を目的とするものではなく、専ら利益を擧ぐるに在るのであるから、官吏の賞罰進退は一に管下より擧ぐる収益の多寡に依り決せられ、此の爲めには苛斂誅求に至らざるなきこととなる。

斯る搾取的暴政を數百年に亙つて繼續したる結果は、和蘭の東印度統治は今や漸く清算の時期に達したるものゝ如く、和蘭の統治は土民の痛烈なる憎惡反感を招くに至れるのみならず、財政的にも東印度統治を維持し得るや否や大なる疑問とせらるゝに至り、既に一九三〇年以來の赤字公債も主として英國の投資に仰ぎ、又最近蘭領印度の軍備外交經濟政策の全般に亙り強力なる英國の觸手を窺ふことを得るに至つたのは、蘭領印度將來の運命を卜する上に於て最

も示唆に富む處と謂はなければならぬのである。

和蘭の統治に對する蘭印土民の組織的反抗は今世紀の初頭より政府の心痛する問題となり既に一九二六七年に互り爪哇及び西部スマトラの各地に叛亂勃發し、數千名の拘禁者と數百名の流島者を出し漸く鎮壓したことがあるが、其後土民の國民運動は暗流となつて益々蔓延し、更に一九三三年に於ては海軍兵員の給料引下問題より土民兵員を中心とする大動搖を來し、巡洋艦ジーン・ブローヴィンツェン號の叛亂となり更に全艦隊に波及し、蘭印政府は全艦隊の水兵に下船を命じ之を拘禁して辛うじて事態を收拾したる事件の如きは、當時世界の耳目を聳動し、印度に於ける排英運動と相俟つて、歐羅巴諸國をして密に亞細亞民族の統治より總退却の覺悟を固め

しめた程であつたのである。更に最近の經濟的崩壞に依り土民の生活窮乏は益々甚しく其の憤滿を激成し、奥地に居住する在留蘭人は身邊の危険を感じて續々都市に引上げつゝありと傳へられて居る。這般の事情は和蘭政府の新聞政策の爲め狀況を審かにするを得ないが、其の險惡なる空氣は充分想像に餘りある處である。今次の日蘭會商に就いても和蘭は自國資本の擁護のため、蘭印土民の犠牲に於て安價なる日本商品の流入を阻止せんとするものであるが、結局和蘭にとつては財政的困難を一層加重し、土民の反抗を増大して、東印度統治より更に一步後退の結果を見るに過ぎないものと觀測されるのである。

蘭印土民の反抗を助成したるものとしては經濟的壓迫の外に、教育の振

興竝に雜婚の獎勵を擧ぐる事が出来る。

和蘭は其の傳統的政策を放擲して一九一五年頃より東印度に於ける教育振興に力を注ぎ、初等中等教育を整備し、専門學校大學を設け、高等教育を旺んにしたる結果は、徒に土民に和蘭の不合理なる統治の正體を暴露し、又無用なる高等遊民を造つたに過ぎなかつた。又和蘭は東印度統治の初めに於て和蘭人の下級官吏と土民との間の雜婚を獎勵したのであるが、其等の子孫は白人の名目を存すれども、外貌實質共に土着人と異なる處尠く、其のために社會的上層に立ち能はざる結果は、非常なる不平を抱くに至り、此の混血兒問題は和蘭統治の痼となるに至つたのである。

日蘭會商に關聯しては左の三個の重大なる事實を注意する必要がある。

(一)貿易問題

蘭領印度に於ける日本品の輸入は、一九三二年に於て和蘭本國を凌駕し、

て首位を獲得し、翌一九三三年に於ては蘭領印度總輸入量の三割二分を占め、和蘭本國よりの輸入の二倍半に達し、日本と蘭領印度との間に於ては三對一の片貿易を見るに至つたけれども、之は我國の廉價なる良品が蘭印土民の生活に最も即したることより來る自然的結果であつて、蘭印政府が和蘭商社保護のために六千萬土民の生活に更に新なる犠牲を課して、日本品阻止の擧に出でたるは大勢を知らざるものと謂ふべきである。

又我國にとつては商品の海外市場發展は現在に於ては逐年膨脹する人口を養ふ唯一の手段なのであるから、此の發展を阻止せらるゝことは、結局膨脹するだけの人口を養ひ得ないことになるのであつて、最も切實なる問題であることを省察すべきである。

○蘭領印度の輸入狀況と日本商品の躍進 (單位千盾)

國

別

一九二八年

一九二九年

一九三〇年

一九三一年

一九三二年

一九三三年

種別	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
日本	九三、六八三	一二四、八六九	一〇〇、一五四	九二、五五一	七六、三三八	九八、四三八
和蘭	一九六、八九四	二二三、五五	一六三、三二五	九八、五七七	五八、〇九六	三九、三三一
新嘉坡	一一〇、六九六	一一一、六六五	九一、二〇九	四六、二七五	四六、二七五	三四、三七五
英國	一一九、九三八	一二七、三三三	八七、九三四	四三、九四一	三五、四九八	三〇、六六一
獨逸	一〇四、七三三	一二六、一〇五	八六、〇三五	五一、九五三	二八、三七四	二四、二三三
米國	九六、八四九	一三一、〇三九	九〇、三六三	五一、三八〇	二四、五五八	一五、五八一
其他を併せ總輸入額	九一、八六三	一〇八、四〇三	八六三、九九四	五六五、一八四	三六八、七六	三二七、九四八

○日本蘭領印度間の所謂片貿易狀況 (單位千盾)

日本より蘭印への輸入

種別	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年	一九三二年	一九三三年
絲及織物	四八、〇〇九	五八、七五七	五四、八六三	五三、九九四	五一、九七三	六六、四〇七
衣服流行品	六、二七六	九、一八四	六、三三九	四、六四一	三、八五九	四、一〇三

鐵鋼及製品	三、九七六	五、〇〇六	三、五〇八	三、一七九	四、五八七	四、〇七七
麥酒葡萄酒	五九〇	五五一	四九九	三二五	六三六	二、六七〇
自轉車及附屬品	九一七	一、四三五	九七〇	一、〇二九	八四九	二、〇一六
陶磁器	六、二〇五	五、九三六	三、〇四六	二、二〇〇	一、九一八	一、八〇八
茶	九、一一一	八、八三〇	八、一六〇	六、七四〇	二、九三三	一、五六一
タバコ	一、六四三	二、二二三	一、九三〇	一、三三六	六八一	一、四一九
食料品	一、二五五	一、七〇八	一、六〇五	一、二二七	一、四三二	一、三九三
セメント	二、九九六	三、九六八	四、二九〇	二、四八四	一、七九二	一、二二五
計 (其他共)	九三、六八三	一二四、八六九	一〇〇、一五四	九三、五五一	七六、三三八	九八、四三八

蘭印より日本への輸出

砂糖	三四、一九五	二六、二一九	二五、二五一	一一、七二二	二、六六八	八、七五二
石油	九、五八四	八、六九三	五、二〇四	三、七五三	六、七六六	四、七七七

玉	二、三六二	一、五四三	四、九五一	五、四七三	五、四八〇	二、五八八
蜀						
護	一、八〇〇	二、六二二	三、一〇三	四、三〇七	二、七四八	二、六八九
探油用實	三三八	二八三	一、〇一六	一、一九三	一、三三一	七三三
錫	四四二	五七〇	一七八	四九六	一八四	五六一
計 (其他共)	五七、一七六	四七、九七三	四六、三三三	三三、〇五二	二三、六五七	三三、六三九
日本より蘭印へ	三六、五〇五	六六、八六六	五三、九三三	五九、五〇〇	五四、六八一	七五、七九八
の						
入						
超						

(二) 邦商問題

蘭領印度政府は輸入制限の外に更に營業制限を以て新規營業を禁止せんとする計畫を有するもの、如くであるが、其の目標とする處は和蘭商社の獨裁的地位を確立するに在り、此のために蘭領印度の商權は輸入より販賣に至る迄和蘭商社及び蘭商又は華僑の縱斷的獨占の時代に逆轉し、折角多年に亘る苦闘に依つて築き上げたる邦商の地位は覆へされ、在留邦人七千人の死活問題なることを忘れてはならないのである。

又之は一面に於て蘭領印度は商業資本としての外國資本をも最早歡迎しないことを表明せんとするもので、既に過去に於て礦物其他重要資源の開發竝に重要工業の起業に關する外國資本の活動を牽制して産業の開發を遅らし、今日の經濟破局を招來したる和蘭が更に其の蒙に一步を進め、商業資本としての外國資本の流入をも抑壓して鎖國政策を完成せんとす暴舉は充分注目に値する處である。

(三) 移民制限

一九三三年十一月蘭領印度政府は國民參議會の協賛を経たる入國令の改正勅令を發布し、其の結果一九三四年度に於て蘭領印度に入國を許可する外國人の總數を一萬二千人に限定し世界を十五地域に區分して各地域より八百名宛の入國者を許可することとなり、日本及び日本委任統治區域は併せて一區域と定められたるを以て、一九三三、四年度に於て日本人の蘭領

印度に入り得る数は八百名に限定せらるゝことゝなつたのである。此の制限は勿論將來に於ても繼續せらるゝものと見るべく、既に移住地としてのブラジルを失ひたる日本は蘭領印度に對しても、通常の手段を以てしては僅かに一箇年八百名の移民を送り得るに過ぎざることになつたことを銘記すべきである。

要之最近に於ける蘭領印度の經濟的破綻に依り、和蘭の東印度領有は財政的に不可能となり、蘭領印度は事實上英國の委任經營に移らんとし、又蘭印土民は此の機會に於て深く和蘭統治の實質を明かにしたる結果民心全く和蘭の統治を離れ國民運動の機運は蘭印土民の間を風靡しつゝあるのである。人口問題の解決上絶対にニューギニアを必要とする我國にとつては正に千載一遇の好機に際會

せるものと謂はなければならぬ。

和蘭がニューギニアの賣却を困難とせざる第三の理由は、蘭領東印度は我國の植民地の如く非常なる犠牲を拂つて獲得したるものではなく、殆んど濡手に粟の如くにして手中に收め得たものであつて、就中ニューギニアの如きは一兵をも用ゐる處なく、チドレ土王の領地に屬したるものをば篡奪したのであるから、之が賣買の問題等に於ても何等歴史的若しくは國民の感情的考慮を必要としないことである。

セレベスの隣島ハルマヘラの西北にタルナテと呼ぶ小島があつて、此の島の小都邑に從來ニューギニアを管轄する和蘭政府の上級理事官が駐在して居たのであるが、過般の行政整理で之はニューギ

ニアのマソクワリ理事官と同級になつたのである。此のタルナテ島附近は往時海賊の跳梁地であつて世界に恐れられた兇暴な土族が住み、タルナテ王は非常に勇敢を以て聞え、其の地方に雄飛して居たのであるが、其の傘下に屬する一獨立王國にチドレ國と云ふのがあつたのである。チドレ國は同名の島嶼を本據としたもので、之は富士山の周圍を圓く切り抜いて海に浮べた様な島であつて、中央に富士型の噴火山が聳え、耕地は極めて少いのである。

チドレ王は又頗る英明勇敢であつて四方を征服し、遠くニューギニアに遠征して其の諸酋長を降し、ニューギニアに對する統治を確立したのである。然るに和蘭は爪哇のソロ、ジョクジャ王を懷柔して其の領地を篡奪したのを、手初めとし、懷柔、籠絡、威嚇、武力等總ゆる

方法を盡して次第に四方の土王土侯の領地を奪ひ、遂にハルマヘラに至り、タルナテ、チドレの兩王は其の敵せざることを知つて和議を結びたる處、和蘭はタルナテ王に軍艦を見物せしむべしとて軍艦に誘ひ、其の儘發航して爪哇に幽閉し、チドレ王には爪哇遊學を勧め、爪哇に至る船中行方不明と報告せられ、共に領土を奪はれ、和蘭の命に依つて暗愚なる幼王が王位を後繼して今日に至つて居ると稱せられて居る。即ち其の植民地獲得の歴史に於て我國の場合とは霄壤の差が存するのであつて、此の點に於ても和蘭のニューギニア賣却は決して困難なものではないのである。

具體的買收案の提唱

以上に依つて我國がニューギニアを絶対必要とする事情及び和蘭が英國の牽制を受け居るは別問題として意外に容易に之を手離し得べき事情を明かにした。然らば最後の問題として此の四十萬方料に達する厖大なる蘭領ニューギニアは果して如何なる評價の下に買收し、又如何なる方法に依つて之が開拓移植民を行ふべきものであらうか。

之は極めて困難な問題であつて、且つ愈々實行に入れば種々臨機

應變の方策に出づべきは勿論であるけれども、其の一試案として十億圓の起債を以てニューギニアの買収より其の經營の端緒迄も附け得る方策として先づニューギニアの買収價格を多少安きに過ぎる様ではあるが、蘭領印度政府の赤字公債額に相當する五億盾に解決する。之は爲替の極めて不利なる現在に於ては四十五盾替として十一億一千萬圓に上るのであるが、内五億圓即ち二億二千五百萬盾を即時拂と爲し、残り二億七千五百萬盾即ち六億一千萬圓に對しては和蘭政府に四分利公債を交付するのである。即ち一箇年約二千五百萬圓の利拂を要することゝなるのであるが、之はニューギニア拓殖獎勵費として暫く政府の特別負擔を以て支出して貰ふことにする。

ニューギニアの買収價格に關しては種々なる見方あるべきも、

(一)ニューギニア本島の土地構成は現在判明せる數字を綜合して大體左の如く推算される。

濕地	七、一〇〇、〇〇〇町步
平野	一、二、五〇〇、〇〇〇
丘陵	六、八〇〇、〇〇〇
高山	五、三〇〇、〇〇〇
不明	六、八〇〇、〇〇〇
計	三、八、五〇〇、〇〇〇

即ち平野は千二百五十萬町步であるが、今日日本の内地には水田が三百萬町步強畑地が三百萬町步弱合計六百萬町步ある。然るに蘭領ニューギ

ニアは内地よりも面積が廣く且つ山岳が少いから、此の比較より考へてもニューギニアに於て一千万町歩の可耕地を得ることは樂であらうと思はれるのであつて、即ち全く未開なるニューギニアに於ては此の一千萬町歩の可耕地を評價の基準と爲すべきであつて、之を町當五十盾に評價して五億盾の數字を得るのである。之は現在の爲替に於て略々百圓であるから、移住者に一町歩百圓で賣れば一千万町歩で十億圓となり十億圓の公債は直ちに返せるのであるけれども、一戸に十町歩宛として百萬戸の適當なる移住者を直ちに造ることは困難であらう。

(二)ニューギニアの土地は開拓後に於ては後に述ぶるが如く町當四百圓の収入を擧ぐることが出来るのであるが、それより生産費、公租、公課負擔の一切を控除したる純益を其の二割八十圓と見て、之を土地利廻を以て還元すれば成墾後に於ける収益價格が出るのである。此の利廻は現在の朝鮮、臺灣に於てすら普通一割見當であるから、ニューギニアに於ては一

割五六分と見られるのであつて、假に一割六分と見れば収益價格は一町歩五百圓と云ふことになる。

之は成墾後に於ける収益價格であるから、現在の評價を求むるためには之より開墾費を差引きたるものを投資利廻を以て開拓年限だけ更に還元すれば良いのであるが、開墾費は後に述ぶる通り町當六十圓にて足り、開拓年限は一箇年四十萬町歩宛開墾を進むれば一千万町歩の開墾は二十五箇年を以て終了し、平均開拓年限は十二箇年半となるのであるが、斯る大規模の開拓には最も安全率を見込む必要があるから、平均開拓年限を十二箇年半に約五年を加へたる十七年として、十七年後に町當五百圓の収益價格ある土地より六十圓の開墾費を差引き、四百四十圓を十七箇年間九分の投資利廻を以て割引すれば、町當現在の評價は百〇一圓二十四錢となるのであつて、其の利廻は九分に過ぎないのであるから百圓

の評價は穩當なものである。

(三)内閣統計局の發表に依れば昭和五年(一九三〇年)に於ける我國の國富總額は一千百一億圓で、其の内土地は四百十億圓を占め總額の三割七分に當る。然るに之より約三十年前の日露開戰當時(一九〇四年)に於ては國富總額二百二十七億圓で、其の内土地は百三十億圓を占め總額の五割七分に當つて居る。即ち此の間に於ける國富の増加には、時代の推移に従ひ物價騰貴に依る評價増と云ふものも鮮からず關係して居るのであるが、それよりも商工業の發展に依り此の方面の國富が非常に増加して居るのであつて、即ち國富の構成が變化し土地の占むる位置が文化の發展と共に次第に後退して行く有様が明瞭に看取されるのである。

之を更に溯つて今より約八十年前米艦來航當時(一八五一年)に至ると、現在と大體同一の略正確なる推計に依つて、日本の國富は五十億圓強であつたことが推算されて居るのである。勿論此の時代に至ると國富の

大部分は土地であつて、此の五十億圓は當時に於ける日本の土地の總評價であつたと云つても敢て差支ないのである。

然しながら當時に於ても日本の國土は大部分既に現在と殆んど變らざる立派なる田畑に耕され、將軍並に大名諸侯を併せ三千万石の經濟を營む徳川文化の基礎をなして居たのであることから考へれば、現に今尙ほ石器時代の蒙を逐ひ全く太古自然の儘の姿に放擲されて來たニューギニアを八十年前に於ける日本の土地の評價の一割即ち五億圓、此場合平價計算の評價は此の意味に於ても決して不當なものではないと思ふのである。

次に十億圓の起債の内から買收費の即時拂五億圓を差引きたる

残り五億圓を以て、ニューギニアに對する移民並に開拓事情を行ふのであるが、先づ四億圓を以て、拓殖會社を起し、同じく一億圓を以て、鑛業會社を起すことにする。

拓殖會社は移民の渡航より其成墾に至る迄一切の費用を貸付し、ニューギニアの開拓を行ふのであるが、移民は一戸平均大人換算四人の構成として、ニューギニアに渡航し、拓殖會社より十町歩の原始林の割當を受け、割當地内に簡易なる住宅を建築し、大規模の機械農業を利用し、十町歩の開墾を完成して、收益を見るに至る迄の費用は一戸當り約二千圓と見て充分である。其の内譯は左の通りである。

移民一家族四人構成(大人換算)の移住費

渡航費

直航移民船に依るを以て一人五十圓にて充分である。

二〇〇圓

住宅費

開墾地の豊富なる木材を利用し得るから之でも充分立派なものが出る。

五〇〇圓

開墾費

町當六十圓の開墾費は少し無理な様であるが、大規模に機械化せる開墾を行ふものなる上、更に開墾地内の有用材を製材會社又は製紙會社に受けしむることが出来るのであるから之にて充分である。

六〇〇圓

生活費

ニューギニアに於ては陸稻、馬鈴薯、玉蜀黍等は數箇月で收穫し得るのであるから食糧は直ちに自給し得るに至るのであるけれども、茲には一人當り十圓宛一箇年分を用意することにす。

四八〇圓

分擔費

拓殖會社の大農業の利益を享受するために必要なる機械農具の共同購入、種苗の共同購入、農耕道路、共同倉庫の建設等に必要なる經費の分擔である。

二二〇圓

計

二、〇〇〇圓

之に依つて拓殖會社は一箇年に四萬戸十六萬人宛をニューギニアに移植することとし、四億圓の資金を以て五箇年間に二十萬戸八十萬人の人口をニューギニアに移植し得るのである。此の場合内地に於ける募集其他の斡旋は政府又は移住組合の事業として其の

協力を得ることとする。

斯くして移民家族は十町歩の原始林を開墾して内八町歩を棉作に充て、二町歩を自家用作物の栽培、養豚、養雞、住宅等に充てるのであるが、熱帯は極めて回収が早く、胡麻の如きは植ゑた其の年の内に五作も收穫を擧ぐることが出来る様な状態であつて、主作たる棉花に於ても町當繰綿最少八百斤の收穫を擧げ、六十圓替として四百八十圓之に棉實の收入を併せ五百圓の收入は確實に擧げ得るのであるから、開墾が出来れば棉作のみにて年四千圓の收入を見る事が出来る様になり、移民は恐らく移住の二年目より早くも生活が安定することになる。

鑛業會社は一億圓の資金の内二千萬圓を以て十萬戸の鑛夫家族

をニューギニアに入れ、更に一千万圓を其の住宅設備に充て、先づ最も確實なる資源たる石油河の採油並に採鑛事業を開始し、五箇年の間に石油は年百萬噸の採油能力となり、數箇所採鑛事業を完成する。

斯くして開始されたニューギニア事業が五箇年の後にどう云ふことになるかと云ふに、

一、移民は農業移民二十萬戸、鑛業移民十萬戸、合計三十萬戸、其の人口百二十萬人が移植され、外に多數の事務者、技術者、指導者及び自由渡航の商人等の渡航を見るから移住人口は裕に二百萬を突破することになる。

二、拓殖會社の事業は二十萬戸の農業移民に依り二百萬町歩の

開墾が完成し、其の内八割百六十萬町歩の棉作地のみを採算することにして、町當五百圓の收入があるから全體では八億圓の收入となり、拓殖會社が其の一割を課税するものとしても八千萬圓の收入を見ることになる。棉花の販賣は總て拓殖會社を通じて行ふことにするが、其の資金は假に事業開始の三年目を例にとれば、未だ貸付を行はざる二箇年間の資金は、拓殖會社の手許にあり、且つ既貸付の古き分は既に収益を挙げつゝあるのであるから資金の運轉は容易である。尙ほ農民は生産物を會社に引渡したる時より三箇月乃至六箇月後に代價の決済を受くることゝすれば、會社の資金は殆んど少額にて事足ることゝなる。

三、鑛業會社は石油年額百萬噸の生産に依り噸當り利益十圓と

して、一千萬圓の利益、其の他の鑛業の利益を二千萬圓と見て、三千万圓の利益を擧げることには樂であらう。

四、それ、拓殖會社の利益と鑛業會社の利益を合はせると年一億一千萬圓の回收を行ふことが出来るのであつて、初めのニューギニア資金十億圓に四分の利子を附し、更に和蘭公債の利子を負擔しても、總額六千五百萬圓に過ぎないのであるから、尙ほ四千五百萬圓の剩餘を生ずることになり、ニューギニア資金の内債十億圓外債六億一千萬圓（二億七千五百萬盾）合計十六億一千萬圓は三十五箇年で償却し得ることになる。尙ほ移住者の激増に伴ひ行政、教育、土木、鐵道、通信施設等に多大の經費を必要とすることになるが、之は拓殖會社、鑛業會社の移民の外一般移住者に對する課税、消

費税、私企業より上る利益等にて支辨し得べく、尙ほ土木、鐵道、通信等私營に委し得るものは全部民間の企業に委ねることにする。

五、拓殖會社は移民の生活安定と共に割當地の拂下を開始するが、收益價格を標準として町當五百圓成墾後の土地であるから最早町當百圓ではないにて拂下ぐることにすれば、二百萬町步にて既に十億圓の財源があるから之に多少の起債を行へば第二期事業は極めて樂になる。斯くして移民は大地主となり、富裕になり、日本の人口問題は緩和し、日本に缺けたる物資は豊富に生産され、國力の躍進は目覺ましきことになる。

前にも述ぶるが如く熱帯の植民地は極めて成功が早く、臺灣は領臺十年にして財政の獨立を行ひ、豆粒の如き南洋群島すら同じく十

年を以て財政の獨立を達成し、三萬の移民を入れ年額一千五百萬圓の生産を擧げ得るに至つて居るのであるから、總ゆる好條件を具へたるニューギニアを大規模に組織的に開發して之を一大寶庫と爲し、日本の人口問題原料問題を解決し得ることは決して困難なことではないと信ずるのである。

只最後の問題として、現に財政經濟の一大難境に苦悶しつゝある際に於て十億圓の起債を行ふ如きことは些か困難なる問題である様であるけれども、千載一遇の此の好機に於てニューギニアの買収を敢行し、人口問題を初め一切の困難なる問題を解決して國家百年の大計を確立せんとする吾人の意圖が充分に理解を得るならば、愛國公債の發行又は當籤附債券の發行等に依り資金を得るの途は決

して困難ではないと思ふのである。

今や蘭英提携の進展及び英領印度より蘭領印度に亘り澎湃として漲る國民運動の深刻なる動きを考ふるとき、南洋問題はとうしても近く一大展開を行ふべき必至の形勢に在るのであつて、吾人は速に一大決意を以て此の機運に善處し、大和民族の膨脹に不安なき發展地を確保すると共に、東洋永遠の平和の礎石を築き以て昭和維新の大業を成就すべきである。而して之は又和蘭にとりても東印度の安全保障を確立し、更に財政的不安をも除去し得るのであるから、其の利益は決して鮮少でないのである。

切に識者の御賢慮に訴ふる次第である。

(終り)

昭和九年十月二十六日印刷
昭和九年十月三十日發行

【非賣品】

東京市麹町區山下町東洋ビル

著者兼
發行人 松 江 春 次

東京市下谷區西町六十二

印刷人 藁 谷 勇 四 郎



南堂書局

CL
NO. 11687

35.4.26

